

初期キリスト教における弟子像変遷の軌跡

新 免 貢

〈紙〉を読む生活など、多くの受難者たちの日寿には、これまでほとんど必要なかった。今もそうであるように、ひとびとの条文や公文書に対する無関心には、分厚い意味が蔵されている。そのようなものをこしらえて出す行政や、いっさいの権威と称する者たちの、生活庶民の生きざまに対するすくいがたい対話不能への本能的な不信が、逆に見えない文字で書かれているのである（石牟礼道子『苦海浄土第三部 天の魚』、河出書房新社、2011年、528頁）。

はじめに——方法と問題設定——

自由主義的なイエス像を徹底的に批判した福音派キリスト教の理論的支柱として知られるプリンストン神学校教授グレシャム・メイチェン（1881-1937年）でさえ、近代世界が精魂を込めて取り組んだ史的イエス探究を「人間の精神史における輝かしい一章」と評した。確かに欧米のみならずわが国においても学問的なイエス研究のために膨大な作業が展開され²、その成果と知見は、キリスト教の実践活動の現場に従事する人々の行動に生かされているだけではなく、キリスト教界の各方面にも深い思想的影響を及ぼしてきた。

一方、イエスに対する関心の度合いと比較して、イエスの弟子集団に関する関心は決して高くはない。ペテロに関する優れた個別研究³はあるもの

の、弟子研究が盛んであるとは決して言えない。しかし、イエスの弟子集団は初期キリスト教史から忘れ去られているわけではなく、諸資料にいろいろな仕方而言及されている。初期キリスト教の諸文献から弟子集団に関する言及例をすべて拾い上げ、それを体系的に記述することは、膨大な時間とエネルギーを要する途方もない作業となるであろう。

そこで、本稿では、正典四福音書を含む初期キリスト教諸文献や一部の教父の著作などにおける弟子描写には一定の弟子像が護教的・文学的仕掛けとして構築されていること、並びに、キリスト教批判者たちの間では否定的な弟子像が思い描かれていることに議論の焦点を定めることにした。さらに、タルムード資料にも言及し、イエス理解をめぐるキリスト教とユダヤ教との間で展開された激しい聖書解釈論争も紹介する。このように限定された枠組みの範囲内における記述からでも見えてくるのは、初期キリスト教史の論争的文脈、すなわち、キリスト教を弁護する側とキリスト教を批判する側との論争、キリスト教内部の意見対立、並びに、キリスト教の典礼様式と信仰表現の多様性である。

本稿は、主要な手がかりとしてギリシア語辞書⁴の編集や初期キリスト教史研究⁵で知られる W. バウアーの論考「諸情報」(“Nachrichten”)に依拠しているが、可能な限り原資料に当たりつつ⁶、その内容を大幅に拡大した記述が試みられている。W. バウアーの論考は、M. ホルンシュエーの論考「伝承の担い手としての使徒集団」(“Die Apostel als Träger der Überlieferung”)と共に、標準的な外典研究『新約聖書外典』の「古代キリスト教伝承における使徒像」(Das Apostelbild in der Christlichen Überlieferung)という項目を構成している。同研究は W. バウアーの死後に出版されたが、「諸情報」は W. バウアー本人の閲読を経ていることを W. シュネーメルヒャーは冒頭の注で断っている。

近年、ナグ・ハマディ文書⁸、ベルリン写本8502所収『マリア福音書』⁹、

チャコス写本所収『ユダ福音書』¹⁰などのコプト語諸資料に関する分析が進む中で、初期キリスト教史が論争史として再構築されるに至っている。このことを考慮すれば、同論考は、イエスの弟子集団に関する証拠資料が最新の状態で紹介されているわけではない。しかし、イエスの弟子に言及した初期キリスト教文献諸資料を広範囲に紹介している点で同論考は今なお価値があると言えよう。

1. 「十二弟子」という表象

1) 正典福音書の各弟子名簿における異同

イエスの弟子の数が文字通り「十二」であったとは到底考えられない。その数を確定すること自体が不可能であると言うべきである。「十二」という数字が「イスラエル十二部族」を模したものであるという一般的説明も、われわれの課題遂行にとっては不十分である。また、聖書学習の便利な手引きとして一般信徒や牧師に活用されている『新共同訳聖書辞典』（新教出版社、2001年、206-207頁）の「使徒」という項目では、「12の数はイスラエルの十二部族に関係するもので、イエスはそれを考えに入れて、それを選ばれたものと思われる」と述べられているが、この説明は、ユダヤ教に取って代わる真のイスラエル、あるいは新しいイスラエルであるというイエス後のキリスト教側の自己理解を生前のイエスに遡らせており、時代錯誤のそしりを免れまい。むしろ、「十二」という数字に達する以前の段階を考慮に入れると、弟子の数は元来、不特定多数であり、人物名や数が次第に規定されていったと見なすほうが適切であろう。つまり、「弟子」は初めから「弟子」であったわけではないと考えられる。

これに関しては、ルドルフ・ブルトマンの分析が示唆的である¹¹。ブルトマンによれば、『マルコによる福音書』（以下、マルコと略記）では弟子たちが一定の集団として語られているが、名も無き信奉者たち、あるいは、マル

コ 3 章20節や34節に描かれているイエスのもとに集まって来た群衆や、イエスを取り囲んでいた人々がイエスの弟子集団の原像を反映させていると言えなくもない¹²。「群衆」に相当するギリシア語の「オクロス」¹³は、同族語の動詞「オクレイン」(=かき乱す)が示唆するように、平穩ではない状態を連想させ、注13で言及した二つのシリア語訳テキストから見ても、社会的な身分の低さ、取るに足らない存在を指し示す語でもある。イエスのもとに集まり、イエスを取り囲んだ人々の集まりは、会員としての適性を吟味するために、入会に際して一定の準備期間が設けられたクラン教団のように厳格な入会条件によって加入が限定された集団ではなく¹⁴、出入り自由の共鳴者たちの群れのようなものであったのではないかと想像される。それは、上下関係を超え、出会いと離脱が繰り返された穏やかならざる群れであったであろう。様々な社会層がイエスに出会ったことを伝えている四福音書は、そういう事情を反映させていると思われる。「弟子」という表象は、著者マルコ以前の伝承段階にはではなく、それよりも後に帰せられるべき枠組みである。イエスの「弟子集団」が徐々に拡大していく様子は、後述するように、イエスと弟子との出会いのきっかけを共観福音書(マルコ、マタイ、ルカ)とは異なる仕方で描いたヨハネの記述から垣間見ることができる。制度としての「十二使徒」構想が、それよりもさらに後の伝承段階に帰せられることは言うまでもない。

「十二弟子」名簿は、以下に示すように、共観福音書のいずれにも掲載されている。ただし、各名簿は同一名簿ではなく、微妙な綴りの違い、言い回しの不一致が認められる。

マルコ 3 章13-19節：¹³そしてイエスは山に上り、自分自身が望んでいた者たちを呼び寄せる。そして彼らは彼のもとに来る。¹⁴そして彼は十二人を立て、[彼らには使徒と名づけた]。それは、彼らが彼と共にいるため

あり、また、彼らを派遣して宣教させ、¹⁵そして諸霊を追い出す権威を持たせるためである。¹⁶ [そしてこの十二人を立てた]。そしてシモンにはペテロという名をつけ、¹⁷またゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、彼らにはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけた。¹⁸そしてアンデレ、そしてピリポ、そしてバルトロマイ、そしてマタイ、そしてトマス、そしてアルパヨの子ヤコブ、そしてタダイ、そして熱心党のシモン、¹⁹そしてイスカリオトのユダ。彼はまたイエスを裏切ったのである。

マタイ 10章 1-4 節：¹そして、イエスは十二弟子を呼び寄せて、汚れた諸霊に対する支配権を彼らに付与した。それは、それらを追い出し、あらゆる病苦、あらゆる病弱をいやすためである。²そして、十二使徒の名は、次のとおりである。まずペテロと呼ばれるシモンと彼の兄弟アンデレ、そしてゼベダイの子ヤコブと彼の兄弟ヨハネ、³ピリポとバルトロマイ、トマスと取税人マタイ、アルパヨの子ヤコブとタダイ、⁴熱心党のシモン、そしてイエスを裏切った者でもあるイスカリオテのユダ。

ルカ 6章 12-16節：¹²このころ、イエスは祈るために山へ出て行き、夜を徹して神に祈っていた。¹³そして夜が明けると、イエスは彼の弟子たちを呼び寄せ、彼らの中から十二人を選び出し、彼らにはまた使徒という名を付与した。¹⁴シモン、彼にはペテロとも名づけた。そして彼の兄弟アンデレ、そしてヤコブとヨハネ、そしてピリポ、そしてバルトロマイ、¹⁵そしてマタイ、そしてトマス、そしてアルパヨの子ヤコブ、そして熱心党と呼ばれるシモン、そしてヤコブの子ユダ、¹⁶それからイスカリオトのユダ。このユダが裏切者となったのである。

マルコの場合、14-15節の目的節（＝「それは、彼らが彼と共にいるため

であり、また、彼らを派遣して宣教させ、そして諸霊を追い出す権威を持たせるためである」。下線は筆者による)で使用されている下線部の不定法や仮定法の動詞がいずれも現在時制であることから示唆されるように、宣教や諸霊追放に遣わされる弟子たちがイエスと共にあり続けることが強調されている。

マタイやルカの各名簿には、そういう文学的動機はない。前者の名簿に記されている名前は、マルコの名簿のそれと一致しているが、各名前は二人ずつ組にして、接続詞“kai”(=「そして」)でつないで記されている。後者の弟子名簿では、マルコやマタイの各弟子名簿に記されているギリシア語名の「タダイ」¹⁵——『使徒言行録』(以下、言行録と略記)5章36節では「テウダス」——とは異なる名前(「ヤコブの子ユダ」)が見られる。この名前は、ユダの脱落を前提にして「十一人」の弟子たちの名前を列挙した言行録1章13節(=「ペテロ、そしてヨハネ、そしてヤコブ、そしてアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブ、そして熱心党のシモン、そしてヤコブの子ユダ」)にも見られるので、著者ルカが異なる名簿を採用した可能性もある¹⁶。ユダヤ学者ヨーゼフ・クラウスナーは、「ヤコブの子ユダ」が本名で、「タダイ」または「レバイオス」を綽名とし、名前が入れ替わっているのは、この人物が成功を収めなかったためか、あるいは、忘れ去られたためと推測する¹⁷。「タダイ」という名前は、二～三世紀に遡る『デレク・エレッツ・ラッバー』と呼ばれるタルムード資料にガリラヤのヘブライ名として言及されている箇所がある¹⁸。この資料の成立年代は、一～二世紀のパレスチナのラビたち(タンナイーム)の時代に帰せられる。ただし、パレスチナにおけるギリシア文化の影響を考慮すれば¹⁹、このギリシア語名がラビ資料に借用された可能性も排除できないであろう。

「熱心党のシモン」(Simōn ho Kananaïos)という名前は、多くの学者たちが指摘するように、「熱心党」を意味するアラム語“Kan’an”に起源があ

るとされる。実際、ルカの弟子名簿では、これが“zēlōtēs”と訳され、「熱心党と呼ばれるシモン」と (Simōn ho kaloumenos zēlōtēs) と表記されている。

列挙されている名前や順番に関しても、若干の違いが認められる。マルコの名簿における側近グループ内の名前の序列 (ペテロ-ヨハネ-ヤコブ-アンデレ) は、マタイの名簿では、兄弟単位でまとめられている (シモンと彼の兄弟アンデレ, そしてゼベダイの子ヤコブと彼の兄弟ヨハネ)。ルカの名簿における序列の順番はこれに従っているが、同じ著者が書いた言行録ではマルコにおける序列と同じである。マルコの名簿における「マタイ」と「トマス」の順番が、マタイの名簿では「トマス」と「マタイ」という順番に変更されていることに加えて、後者では「マタイ」は「取税人」の肩書が付いている。マタイの著者が「十二人」の一人「マタイ」を取税人に仕立て上げた動機は容易に推測できる。マルコ 2 章 14 節は、レビが「われに従え」とのイエスの招きに答え、イエスに従ったことを描いているが、同 3 章 16-19 節の弟子名簿には召命に答えた「レビ」の名はなく、「マタイ」の名が記されている。そこで、イエスが取税人「レビ」の家に招かれ、宗教当局側から見下されていた「罪人」たちや取税人たちと食事をしていることを描いたマルコ 2 章 13-17 節を模したマタイ 9 章 9-13 節において、マタイの著者は取税人「レビ」の名前を「マタイ」に変更した。こうして、取税人マタイが仕立て上げられるに至った。

「裏切者」の烙印を押されている「ユダ」の人物像や裏切り行為に関しては諸説紛々あり、次項で詳しく取り上げる。

2) 謎に包まれたユダ

イエスをユダヤ教当局に引き渡したユダの出身地に関しては、「イスカリオテ (Iskariōtēs)」(マタイ 10 章 4 節) と「イスカリオト (Iskariōth)」(マ

ルコ3章19節、ルカ6章16節)の二種類の綴りがある。前者は、後者をギリシア語化したものである。「イスカリオト」が「人」を意味するヘブライ語の「イーシュ」(יִישׁ)と「ケリヨト」(Qeriyyôt)との組み合わせであるとすれば、それは、「ケリヨト出身の人」という意に解することができる。エレミヤ48章24節において列挙されているモアブの東、死海東岸の地名の一つ「ケリオテ」との関係がしばしば指摘されている。一方、『ヨシュア記』15章25節のネゲブの「ケリオテ・ヘヅロン」との結びつきを指摘する解釈もある。いずれにせよ、「ケリオテ」は、ユダヤの南に位置しており、イエスの弟子集団とつながりのあるガリラヤから遠く離れている。「ケリヨト出身の人」説に立てば、「ユダ」はイエスの斬新な教えに惹かれて、遠く離れた場所からイエス運動に参入した並外れた人物であったという想像も湧いてくるが²⁰、詳細は不明である。

ヨハネ6章71節(=「すなわち、彼は、イスカリオテのシモンの子ユダのことを言っていたのである。この男は十二弟子の一人であり、彼を裏切ろうとしていた。」)における「イスカリオテ」の有力な異読には、「カリュオートス出身の」(四世紀起源のシナイ写本など)とあることも、「イスカリオテのユダ」または「イスカリオトのユダ」=「カリオテ出身のユダ」説を裏付ける一つの証拠例とされている。さらに、ヨハネ12章4節、13章2節、26節、14章22節において、ベザ写本は、「イスカリオテ」ではなく、「カリュオートス」という読みを採用している。

「イスカリオテ」に関しては、他にも異なる解釈があり、「ナツメヤシ」「皮袋」「刺客」「嘘つき」「赤みがかった表情」「染物師」などの意味が推測されている²¹。

「カリュオートス」(karuōtos)と書き記した写字生は、「ナツメヤシ」を意味する“karuōtis”を念頭に置いていたとすると、「イスカリオテのユダ」は「ナツメヤシのある町出身者」の意味に解することもできる。戦前ドイツ

の神学者グスタフ・ダールマンは、「イスカリオテ」という言い方はアラム語の語法としては一般的な言い方であったにもかかわらず、その意味が福音書記者にとって不明であったから、訳されないままであったと推測する²²。確かに、「ケファ」(ヨハネ1章42節)や「ボアネルゲ」(マルコ3章17節)などといった他の弟子たちの名前と違って、「イスカリオテのユダ」あるいは「イスカリオトのユダ」の場合、名前の説明がない。

「皮袋」説は、“Iskariōth”または“Iskariōtēs”を、タルムードで「革袋」を意味する“isqortiya”と結びつける²³。これは「革製の外套」を意味するラテン語(scortea)からの借用語である。この説は、革袋に金が入れられ、それを外套に縫い付けてユダが携帯していたという想像を生みだす。この説は、ユダが「袋(glossokomon)を持っていた」と描写しているヨハネ12章6節を想起させるが、言語上ヨハネ12章6節とは無関係である。

「刺客」説は、“Iskariōth”または“Iskariōtēs”を、「刺客」を意味するラテン語(sicarius)——“sica”は「短剣」を意味する——からの借用語であるギリシア語の“sikarios”と結びつける。この“sikarios”という単語は、言行録21章38節(=「それでは、お前こそは、暴動を起して四千人の刺客を引き連れて荒野へ連れ出したこのあいだのエジプト人ではないのか」)に見られる。この箇所に関連する証拠例として、戦記(II.13.3以下)²⁴や古代誌(XX.8.6)²⁵を挙げることができる。これらの記録によれば、刺客集団は短剣を外套に忍ばせ、群衆に紛れ込んで政敵たちを倒し、助けを求めふりをした。例のエジプト人は自ら預言者であると宣言し、多くの信奉者集団を結集し、オリーブ山に引き連れ、自分が命令すればエルサレムの城壁が崩壊することを約束した。彼の勢力は総督フェリックスの攻撃を受け、彼自身はエジプトに逃れたと言われている²⁶。「イスカリオテ」または「イスカリオト」が上述の類の暴動に関与した刺客を意味するならば、当時の歴史状況と結びついた刺客ユダのイメージが膨れ上がる。しかし、“sicarius”や

“sikarios”の長母音——“si-”の“i”——をどうしても落とすわけにはいかないで、“Iskariōth”または“Iskariōtēs”を“sicarius”と結びつけるのは言語学上無理があるであろう。

アメリカの聖書学者チャールズ・トーレイ（1863-1956年）が開陳する「嘘つき」説によれば、「イスカリオテ」は、「偽り」を意味するアラム語（“šeqar” “šiqra”）、あるいはシリア語の“šiqrâ”に由来する²⁷。ユダの裏切り話がパレスチナで広まるにつれて、発音しやすいように母音の語頭音が添加されて「エフダ・イシュカルヤー」、すなわち、「不実のユダ」という言い方を人々は軽蔑を込めて繰り返し使用するようになり、こういう言い方が残っていったというわけである。この説は、二つの子音が続く場合、母音を語頭韻として添加する方が二か国語使用のパレスチナの原始教団にとって発音しやすかったであろうという事情を考慮に入れているが²⁸、推測の域を出ない。

ペンツタ訳、ハルクレア訳（六世紀）、シナイ写本シリア語テキストの各シリア語訳では、ルカ22章3節とヨハネ6章71節において「イスカリューター」という読みを採用している五世紀初期のクレトニア写本のシリア語訳テキストとは違って、一貫して「スカリューター」という読みを採用している点は見逃せない²⁹。また、クレトニア写本を除く上記のシリア語諸訳では、「裏切る者」に対して「引き渡す」を意味する動詞（シュレム）に由来する語を当てている³⁰。この「引き渡す」という語自体、初めから否定的な意味が含まれているわけではない。

「赤みがかった表情」説は、アラビア語の語幹“šqr”と結びつける解釈である。それが馬に関して使用される場合には赤みがかった褐色を、人に関して使用される場合には赤ら顔を意味する³¹。シリア語の“sqarta”が「赤い塗料」を意味することも留意すべきであろう³²。パルミラ出土の嵌石に刻印された固有名詞“SQRA”と“ŠQRA”の語幹“saqar”は、アラム語では

「赤く塗る」「赤い塗料で印をつける」を意味する³³。

「染物師」説は、シリア語の語幹“sqr”から、これを赤く染める意に解する³⁴。この説によれば、ラビ・ヨハナン・ベン・ザッカイの甥で、第一次ユダヤ戦争時（約66-70年）の短剣所持の暗殺者集団シカリ派の指導者アバ・サッカラ（『ギッティン』56a）³⁵もイスカリオテのユダも「染物師」ということになる。しかし、ユダが染物師の仕事をしていたのであれば、そういう趣旨の説明が各弟子名簿にあってもよさそうなものである。

中世ではユダの髪の毛や顎髭が赤い色で描かれているが、そのことを確認できるのは九世紀までと言われている。六世紀初期に遡るモザイク画では、ユダは黒髪と黒ひげで描かれていると指摘されている。それゆえ、上述のアラム語、シリア語、アラビア語の各語幹から引き出される意味合い——「赤みがかった表情」「赤い塗料」「赤く塗る」など——が、中世のユダ像に影響を与えたかどうかは定かではない。ユダの髪の毛や顎髭が赤い色で描かれていることに関して、紋章学の専門家ミシェル・パストゥローは、地獄の劫火を思わせる「赤」と結びついて「赤」が裏切りの象徴とされたと言及する³⁶。

さらに最近、“sqr”に「息つまる状態」「締めつけるもの」という意味を読み取る新たな説も提唱されている³⁷。しかし、「イスカリオテ」または「イスカリオト」が「息つまる状態」「締めつけるもの」と関係があるならば、ユダを弟子名簿に記載する場合、「このユダが縊死したのである」という類の説明があってもいいはずである。ユダの縊死を伝えているのは、マタイだけであることから見ても、この説には無理がある。そもそも他の正典福音書に言及例のないユダの縊死の事実性を立証することはできない。

以上概観したように、「イスカリオテ」または「イスカリオト」という名前の語源は今なお納得のいく説明はできていないのが実情である。

確かに、裏切り行為自体はイエス集団の中に発生しても奇妙ではないが、

最近の北米圏の有力な学者たち³⁸の間では、「ユダの裏切り」をねつ造とする見解も見られる。七十人訳『イザヤ書』（以下、イザヤと略記）53章に描かれる「苦難の僕」に基づいて、イエスのことが「主はわれわれの諸々の罪に彼を引き渡した」（53章6節）³⁹と解釈され、イエスを引き渡す役割がユダに帰せられた可能性も否定しきれない。たとえば、ドミニク・クロッサンは、ユダはイエスを裏切ったことの歴史性を認めつつも、彼は「十二人」に属していなかったと主張する。というのは、「十二人」は、ユダヤ教の古いイスラエル十二部族を模した新しいキリスト教の「十二族長」の象徴的編成だからである⁴⁰。バートン・マックはこのドミニク・クロッサン説をさらに徹底させて、ユダによるイエスの「引渡し」行為が創作であると主張する⁴¹。マルコの著者は、「引渡し」のモチーフをイエスにだけではなく（14章41節、15章1節、15節）、イエスの死後における弟子たちにも適用し（13章9節、11節）、両者の運命の類比を意図している。また、マルコ13章12節が示唆するように（＝「また兄弟は兄弟を、父は子を、死に至らせるために引き渡し、子たちは親たちに向かって反抗し、彼らに死をもたらすであろう」）、イエスの死後を生きる現実の共同体内では離反、背教、裏切りなどの深刻な事態が発生したのであろう。同じ文脈に置かれているマルコ13章9節には、ユダヤ教の会堂で打ち叩かれる経験が反映されているので、著者マルコの構想においては外部の敵対者の中に「ユダヤ人」が含まれている。これらの箇所では、この敵対する「ユダヤ人」が離反者や背教者や裏切者などを含む内部の敵対者のイメージとも重なっていると読めなくもない⁴²。そうであるならば、「ユダヤ人」を連想させる「ユダ」なる人名を用いて、裏切者「ユダ」が作り上げられたかもしれない。要するに、「ユダの裏切り」をねつ造とする見解は、「ユダヤ人」がスケープゴートに仕立て上げられたとする立場に立つ。初期キリスト教の再構築を活発に試みてきたエレヌス・ペーゲルスやカレン・キングも、ドミニク・クロッサンやバートン・マックの仮説をふまえ、

創作説に傾いている⁴³。こういう大胆な仮説が生まれる背景には、ユダヤ教やユダヤ人を意識する学問的なイデオロギーが絡んでいるかもしれないが、イスカリオテまたはイスカリオトのユダに関する証拠資料が極めて乏しいという事情がある。しかし、ユダ問題は、『ユダ福音書』をめぐる議論⁴⁴と共に、キリスト教の諸起源に関する研究の方向に一石を投じていると言える。

いずれにせよ、新約聖書の四福音書においては、裏切り行為は一様に「ユダ」なる人物に帰せられているが、「皆イエスを捨てて逃げた」（マルコ14章50節）と伝えられている以上、裏切ったのはユダだけではない。さらに、上記三名簿における「ユダ」に付けられている説明には微妙な差異が認められる。マルコ3章19節では「また彼（＝イエス）を裏切ったのである」（*hos kai paredōken auton*）、マタイ10章4節では「彼（＝イエス）を裏切った者でもある」（*ho kai parados auton*）、ルカ6章16節では「裏切者となった」（*egeneto prodotēs*）と記されているが、時代を経るにつれて、「裏切者ユダ」のイメージが固定化され、類型化されていることが看取される。「裏切った」「引き渡した」という文章表現が「引き渡す者」「裏切者」と端的な名詞表現に変えられることにより、ユダは「裏切者」という範疇に組み込まれ、その烙印を押され続けることになった。ヨハネでは、ユダがイエスを引き渡す役割を担っているだけでなく、捧げられた金を着服する「盗人」（*kleptēs*）とまで評されている（12章6節）。ユダの最後については、マルコには一切言及がなく、マタイでは縊死したと伝えられている（27章5節）。ルカにもユダの最後について言及はないものの、同じ著者による言行録（1章18節）では、転落死し、腹が裂けて悲惨な最期を遂げている。使徒教父文書に収められている二世紀前半成立の『パピアス断片』（3）⁴⁵では、「不信仰の重大な典型例」（*mega asebeias hupodeigma*）としてユダの最期は、原形をとどめないほど体が膨れ上がり、ウジ虫が湧いたとまで描写されている。歴史的ユダにまつわる謎は深まるばかりである。

3) 「再会」(1. 55-62)『偽クレメンス文書』

上記の共観福音書のいずれの名簿においても、ペテロの名が筆頭者として記載されている。しかし、複雑な成立史ゆえに年代を決定し難い『偽クレメンス文書』の「再会」(1.55-62)⁴⁶では、事情は異なる。そこでは、十二弟子がユダヤ教指導層とサマリア人を相手に議論している場面が描かれている。以下の箇所は、神学的思想に関して言えば、パウロ的傾向よりもユダヤ人キリスト教色が強く反映されている部分であると言えよう。

たとえば、罪の赦しのために神から与えられた犠牲の儀式をいろいろな頌詞で称える大祭司が、犠牲とは相いれないものとして導入されたイエスの洗礼を非難した際、マタイは次のように反論した。洗礼を受けるところまでいかなければ天の国を取り上げられる。しかし、たとえ善きいのちと正直な性質という特権によって力づけられようとも、死者の復活の際、危険にさらされないわけではない。

ペテロの兄弟アンデレは、死者が復活すると考えるのは誤りとするサドカイ派の者と議論して、死者の復活は信仰に関わる最も確実な事柄であり、モーセが到来を予言した真の預言者なる者(イエス)の教えに一致すると反論した。

礼拝場所をエレサレムではなくゲリジム山に定め、イエスはモーセが到来を予言した預言者ではなく、死者の復活もないと主張するあるサマリア人に対して、ゼベダイの息子たち、すなわち、ヤコブとヨハネは激しく応酬した。ヤコブは死者の復活を論じ、ヨハネは、モーセがしるしを行ったようにイエスもしるしを行った以上、イエスはモーセの予言通り来るべき者であることを論証した。

イエスは預言者としてではなく魔術師としてしるしを行ったと律法学者の一人が叫ぶと、ピリポは真剣に相対した。イエスがユダヤでしるしと不思議を行ったようにモーセはエジプトでそれらを行い、イエスに関して言われて

いることはモーセに関しても言われているとピリポは指摘した。

ファリサイ派の一人がピリポをたしなめ、イエスをモーセと同等に置いていると言うと、バルトロマイは、イエスはモーセと同等であるどころかモーセよりも大いなる者であると大胆に論じた。というのは、モーセはイエスと同様に一人の預言者であったが、イエスのようにキリストではなかったからである。

アルパヨの子ヤコブは、預言者たちがイエスについて予言したというよりもキリストが彼らについて証言したがゆえにわれわれはイエスに信を置くことを論証した。キリストの現臨と到来は、彼らが真の預言者たちであることを証明している。証言というものは、より優れた者がより劣っている者に対して行うのであって、その逆ではない。

レバイオスは、イエスが打ちひしがれている者たちを慰め、病める者たちを癒し、貧しい者たちを助け、神に由来する教えの数々を説き、あれだけの善きことを行ったにもかかわらず、イエスを信じていないことを激しく非難した。

ヨハネの弟子集団の一人は、イエスではなくヨハネこそがキリストであると主張した。ヨハネはすべての人間や預言者たちよりも偉大であるとイエス自身が宣言しており、ヨハネはモーセよりも、そしてイエスよりも偉大であると論じた。このようにヨハネがすべての者よりも偉大であるならば、ヨハネがキリストに他ならない。こういう論法に対して、熱心党のシモンは次のように反論した。ヨハネはすべての預言者たちや、女たちから生まれたすべての者よりも偉大であるが、「人の子」(イエス)より偉大なのではない。イエスはキリストであるが、ヨハネは一人の預言者にすぎない。先駆者と彼の先駆者との間に大きな違いがあるのと同様、イエスとヨハネとの間にも大きな違いがある。律法を付与する者(イエス)と律法を守る者(ヨハネ)との間にも大きな違いがある。

ユダの代わりに使徒となったマッティヤとも呼ばれるバルナバ——「バルサバ」と読むべきか——は、イエスのことを悪しざまに言うべきではないと勧告した。イエスを知らず、疑う者にとってさえ、イエスを憎むより愛するほうが正しいからである。というのは、神は愛には報い、憎しみには罰を加えるからである。イエスはユダヤ人の肉体を帯び、ユダヤ人の間に生まれたという事実そのもののゆえに、われわれはイエスへの愛に駆り立てられる。

貧しい人たちを祝福し、この世的な報いを約束するなどといったイエスの教えにカヤパが異議を唱え、その異議申し立てはつまらないとトマスが反論した。カヤパの信じる預言者たちはもっと多くのことを教えたが、これらのことがどういう仕方で起こるかは明らかにしなかった。しかし、イエスはこれらのことの意味を指し示した。

カヤパは、今後キリスト・イエスを宣べ伝えることを慎むようにペテロに言いつけた。それは、身の破滅を招き、自らを欺き、そして他の者たちをも欺くことのないようにという警告と非難が込められていた。さらにカヤパは、漁師で田舎者であり、教育を受けていないペテロが大胆にも教師の職務を引き受けていることを無礼だと告発した。それに対して、ペテロは次のように反論した。自分がキリストを律法の教師として受け入れているからといっても、イエスがキリストでないならば、さほどの危険はない。しかし、このイエスがまさしくキリストそのものであるならば、カヤパはとんでもない危険にさらされることになる。到来した方を自分は信じている。漁師で田舎者であり、教育を受けていない自分が賢い長老たちよりも理解力があるとすると、カヤパの心胆を寒からしめるはずである。なにほどこかの学識をもって疑義をはさみ、学識ある賢者たちを説き伏せるならば、その力は長い学的訓練の積み重ねによるものであり、神の力によるものではないであろう。しかし、学的訓練を受けていない者たちが賢者たちを説得し、議論に打ち勝つな

らば、それが神の意志と賜物によるものであることがわかっていく。

この場面では、マタイ、アンデレ、ヤコブとヨハネ、ピリポ、バルトロマイ、アルパヨの子ヤコブ、レバイオス、熱心党シモン、マッティヤとも呼ばれるバルナバ（バルサバ?）、トマスの順に各弟子の名が挙げられ、ペテロが十二弟子の最後の論者として登場している。議論の相手は、祭司、サドカイ派、サマリア人、律法学者、ファリサイ派、ヨハネ集団などである。これらの議論の相手は四福音書の随所に登場しており、この場面が、言行録も含めて、主として四福音書から広範囲に素材を得ていることは確かであろう。また、四福音書に描写されているイエスと論敵たちとのやり取りが、弟子たちと論敵たちとの対話に転換されているという印象を受ける。しかも、その転換は形式的な役割転換ではなく、ある一定の神学的議論の積み重ねが窺える。というのは、死者の復活、聖なるエルサレム、天の国、イエスがキリストであることに関する議論を総括する際（1.63）、ペテロは、聖霊による以外に救いの道はないこと、父、子、聖霊、洗礼、主キリストの聖餐、神との和解などといった神学的考察を開陳しているからである。千の祭壇に灯りをともしても神との和解は不可能であるというペテロの主張は、この場面における議論がキリスト教内部にとどまらず、ユダヤ教に対する論争的性格を反映していると考えられる。したがって、ペテロが十二弟子の最後の論者として登場していても、弟子集団におけるペテロの指導者的地位が引き下げられているわけではなく、彼はいわゆる取りとして議論を仕切っていると言えよう。

4) 「十二」へのこだわり

復活のイエスの顕現を体験したと伝承されている者たちの順序において、「ケファ」に次ぐ第二番目の顕現体験者として、パウロは『コリント人への第一の手紙』（以下、第一コリントと略記）15章5節において「十二人（ドー

デカ)」⁴⁷に言及している。第五番目の顕現体験者として挙げられている「すべての使徒たち（ホイ・アポストロイ）」（同15章7節）の人数は不明である。これは、「十二人」よりは拡大された集団であると思われるが、伝道に派遣された者たちを漠然と指しているのではなく、かなり限定されたイエスの内輪の弟子集団であったとハンス・リーツマンは例の古典的注解書において推定する。そのことは、第四番目の顕現体験者として挙げられている「ヤコブ」に関して、パウロが「主の兄弟ヤコブ以外には、使徒たちの他の者には会わなかった」（『ガラテヤ人への手紙』1章19節）と述べ、「柱として目されているヤコブとケファとヨハネ」（同2章9節）という言い回しを使用していることから裏付けられるであろう⁴⁸。

一方、教会史家カイザリアのエウセビオス（260頃-339年）は、『教会史』（1.12）⁴⁹において、パウロ同様、いわゆる「十二使徒」にならった使徒たちが多数いたと記述し、また、ルカ10章1節の「七十人弟子」に関連して、具体的な名簿は存在しないものの、パウロの同行者「バルナバ」、第一コリントの共同発信人「ソステネ」、ユダの代わりに補充された「マッティヤ」、籤に外れた「バルサバ」などが「七十人弟子」の中に含まれるとする。

それでもやはり、この「十二」という数字の方がその後長く記憶され、イエス復活後の描写においても諸資料で堅持されていると言える。確かに、新約聖書には、ユダの脱落との関連で「十一人」（ヘンデカ）が正確に言及されている箇所⁵⁰もある。また、三世紀成立とされる『トマス行伝』のように、「ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、ピリポとバルトロマイ、トマスと取税人マタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党のシモン、ヤコブの子ユダ」（1章）⁵¹という「十一人」の弟子名簿を掲載している外典文書もある。これについて、W. バウアーは、言行録1章13節の弟子名簿を実質的に繰り返しているとしているが、それは事実と反している。『トマス行伝』の弟子名簿は、どう見ても、他の上述の

弟子名簿と比較して、マタイ10章2-4節に近いと言わなければならない。しかし、以下述べるように、外典諸文書や諸教父の作品などの多くの諸資料では「十二」という数字は忠実に守られている。

たとえば、イエスの受難と復活を描いた二世紀成立の外典文書『ペテロ福音書』(59)では、ガリラヤ湖畔における復活のイエスの顕現の場面で、「そして、われわれ主の十二弟子は、泣き叫び、悲嘆にくれた。そして、各人は、起った事のゆえに悲嘆に暮れながら、解散して自分の家に行った」⁵²という一文がある。

次に、最終的には二世紀成立とされ、典型的には黙示文学に属する外典文書『預言者イザヤの殉教と昇天』のいくつかの箇所では、文脈上、欠員が一人生じて「十一人」となるべきところで、「十二」という数字のままである。実際、『預言者イザヤの殉教と昇天』3章17節では「愛されている者が彼らの肩に坐って出て来て、彼の十二弟子を送り出す」と述べられている。これは、キリストが天使たちを従えて再臨する際に「十二弟子」を派遣するという場面を描いている⁵³。4章3節では「彼(ペリアル)は愛せられる者の十二使徒が植えた樹を迫害する。十二人のうちのひとりには彼の手に渡されるであろう」とあり、これはネロ帝(54-68年在位)下の迫害とペテロの殉教を示唆していると言われている⁵⁴。11章22節では「わたしは、彼が十二弟子を派遣して、昇天するところを見た」とあり、三日後に復活したキリストが「十二弟子」を派遣したことになる。

エウセビオスが『教会史』(4.3.3)⁵⁵において「信仰の人」(pistis anēr)と評し、また、ラテン教父ヒエロニムス(345頃-420年)が『著名者列伝』(De viris illustribus, 20)において「きわめて雄弁なアテネ人哲学者、古風な服を身にまとったキリストの弟子」⁵⁶として紹介する二世紀の教父アリステイデスは、ハドリアヌス帝(117-138年在位)宛て『弁明』(Apologia)を書き、元素崇拜や多神教、真の神を知らないユダヤ人の誤りとキリスト教の

正しさを論じた。『弁明』2章で、彼は、ヘブライ人の出であるイエスには「十二人」の弟子たちがいたこと、イエスがユダヤ人に殺されたが三日後に復活し、昇天してから、「十二人」弟子たちが世界各地に出て行き、謙遜と正しさの限りを尽くしてイエスの偉大さを示し続けたこと、それゆえ、それを信じる者たちがクリスチャンと呼ばれ、有名になっていること、などについて述べている⁵⁷。これは、初期キリスト教の護教論⁵⁸の一例である。

アテネ・ローマに学び、さまざまな哲学諸派をへてキリスト教にたどりついたギリシア教父ユスティノス（100?-162年?）は、「エルサレムから十二名の人々が世界へと出ていき、これらの人々は無教養（イディオータイ）で、語る能力はなかった」（『第一弁明』39.3）⁵⁹と記している。ユスティノスはまた、『トリュフォンとの対話』（42章）において、「十二使徒たちは永遠なる祭司キリストの力によって派遣されて、彼らを通して全地が神と彼のキリストの栄光と恵みの声に満ち溢れた」⁶⁰と述べている。

カルタゴの神学者で、最初のラテン教父テルトゥリアヌス（160頃-220年以降）は、『マルキオン反駁』（4.13）において、キリストが「十二使徒」を選ぶ際、何か他の数ではなく「十二」という数字をなぜ選んだのかと問いを立て、これが「十二の泉」「十二の宝玉」「十二の石」などを表わす象徴的な数字であると考えた。「十二使徒」は、知識のない乾き切った異邦人世界を潤す泉や川にたとえられる。「十二使徒」は、御父の大祭司なるキリストが身にまとう教会の神聖な衣に輝きを与えるとされる。あの高潔なヨシュアがヨルダンの地層から石を取り出し、契約の聖所に置いたが、「十二使徒」は信仰のしっかりした石のようであるとされる⁶¹。

二世紀後半のリヨンの司教エイレナイオスは、『異端反駁』（1.3.2,18.4; 2.21.1; 4.21.3）において、「十二」という数字を、グノーシス派の宇宙観の枠組み——「十二のアイオン」——にも適用し、また、「十二部族」や、「十二」の柱がついた土台としての教会とも結びつけている⁶²。

初期キリスト教を代表する神学者アレクサンドリアのクレメンス（150-215年?）の著作『ストロマテイス』中に断片として伝わる『ペテロの宣教』では、イエスは復活後、ふさわしいと自分が判断した「十二弟子」を選んでいる。イエスは、彼らを真の使徒として確信した上で、全世界の人々に唯一の神を知るようになるとの喜ばしいメッセージを伝えるために、聞いて信じる者たちが救われるために、弟子たちを送り出す。弟子たちは十二年間エルサレムにとどまって宣教活動を行い、それから世界宣教に出向くことになっている（4.5.43; 6.5.48）⁶³。

ヴァレンティノス派の重要人物テオドトスの教えを記録したクレメンスの『テオドトスからの抜粋』によると（25）、誕生が地上の出来事に影響を与える黄道十二宮によって管理されているように、再生は「使徒たち」によって管理されているとヴァレンティノスは述べている。そこでは「使徒たち」は黄道十二宮に置き換えられている⁶⁴。ヴァレンティノス派の救済観においては、「・・・解放をもたらすのは洗礼だけではなく、われわれが何者であり、われわれが何になったか、そして、われわれは何になっているのか、われわれはどこにいたのか、あるいは、われわれはどこに置かれたのか、われわれはいずこへ急ぐのか、われわれは何から救済されているのか、誕生とは何であるのか、再生とは何であるのかに関する知識である」(78)⁶⁵とされる。

ギリシア教父オリゲネス（184/5-253/4年）の『ケルスス駁論』（1.62）⁶⁶によると、キリスト教の論敵ケルススは、「十人」と「十一人」の二通りの言い方をしている。ケルススによれば、イエスは十人か十二人の破廉恥な連中を連れていたが、彼らはきわめてよこしまな（ponērotatoi）徴税人とか舟乗りであった。イエスは、彼らと共にみっともない仕方でも、かつ貧窮状態で食物をあつめながら各地に逃げ回っていたとするケルススに対して、オリゲネスは、ケルススは弟子の数を正確に知っていないとして、イエスが十二弟子を選んだことをはっきり指摘する。また、たった十人ばかりの度し難い

舟乗りや徴税人を自分の味方に引き入れたただけだとするケルソスに対して、オリゲネスは、十人や百人どころか、一度で四千人や五千人の人々を引きつけたと反論する（同2.46）⁶⁷。

ヨハネでは、イエスによって「十二人」が選ばれる場面は記されていないが、「十二人」の選出は前提とされている（6章67-70節以下⁶⁸）。しかし、それよりも注目すべきは、弟子の数が徐々に拡大していった形跡をうかがわせる記述である。1章35節以下によると、洗礼者ヨハネの二人の弟子の内、一人はシモン・ペテロの兄弟アンデレである。アンデレは兄ペテロをイエスに引き合わせる。その翌日、イエスはピリポに出会い、ピリポはナタナエルに出会い、ナタナエルはイエスに出会う。このナタナエルは、復活後のイエスにガリラヤ湖畔で出会うが（21章2節）、いわゆる「十二人」の中には入れられていない。そういう意味では、ヨハネの場合、他の三福音書、すなわち、共観福音書と比較して、「十二」という数字、少なくとも、「ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ」といった側近グループへの関心はそれほど強くないように思われる。

四世紀にシリアで成立したと見なされる『使徒憲章』（6.14）は、イスカリオテのユダに代わるマッテヤを含む「十二人」——ペテロとアンデレ、ゼベダイの子たちヤコブとヨハネ、ピリポとバルトロマイ、トマスとマタイ、アルパヨの子ヤコブとタダイというあだ名で呼ばれるレバエウス、熱心党員シモン、マッテヤ——を、主の兄弟ヤコブやパウロと共に宣教者として規定している⁶⁹。

このようにいったん制定された構成員の数を変えないまま継続させている例は、古代ギリシアの軍人、著述家クセノフォンの『ギリシア史（ヘレニカ）』（2.4.19; 2.4.23）⁷⁰にも見られる。ペロポネソス戦争に敗れたアテナイで成立した寡頭政の政権、「三十人」による支配体制の確立後、クリティアスとヒッポマコスがすでに死んでいるにもかかわらず、「三十人」政権が継

続しているかのように記述が進められている。

5) 『ユダ福音書』『マリア福音書』『トマス福音書』

二世紀半ばの成立と推定される『ユダ福音書』においてさえ、「十二弟子」という表象が使用されている⁷¹。ただし、彼らは、肉体的犠牲を模した聖餐儀礼を繰り返す、霊的救済の秘儀から離れているとして批判されている⁷²。ここでは、弟子の主役は、イエスから秘儀を開示された「ユダ」である。

一方、思想傾向が似通った『マリア福音書』においては、マリアが他の男弟子たちよりも優位にあり、「十二弟子」という発想すらない。マリアは、死の恐怖に直面して意気消沈する男弟子たちを叱咤激励する際、「私たち」という言い方で、男と女の両方を含めた弟子集団を思い描いている⁷³。ペテロが弟子集団の代表格でありながら、霊的資質に恵まれたマリアが指導者であるかのように堂々と論陣を張り、幻視体験を語る。また、弟子集団内における意見の対立も垣間見える。アンデレはマリアの主張を異質なものとして疑問視するが、レビはマリアの言い分に賛同を示す。男弟子同士の間でも必ずしも意見が一致しているわけではない。弟子集団から追放されようとするマリアが問題提起者として活躍し、弟子間の拮抗関係が反映されている⁷⁴。

『トマス福音書』においても、「十二弟子」という発想はなく、マリアをめぐる弟子間の軋轢が垣間見える（たとえば、語録114）。

2. 「五弟子」

七世紀に最終版が完成したと言われるバビロニア・タルムードの『サンヘドリン』（43a）では、「十二人」ではなく、「五人」である。しかも、そこには考え抜かれた論争の跡が窺える⁷⁵。聖書引用は関根訳⁷⁶に拠る。

過ぎ越しの前夜、イエシュは磔にされた。四十日前、お触れ役は出て行

き、叫んだ、「奴は、魔術を使い、イスラエルを惑わし、背教させたという理由で石打刑を受けることになる。奴の弁護のために何か言うことがある者は、来て申し立てよ」と。だが、奴の弁護のためになることが何も申し立てられなかったから、過ぎ越しの前夜、奴は磔にされたのである——ウッラは言い返した、「そもそも奴のための弁護なんぞ努力してやれるとでも思うかね？ 奴はまさに誘惑者だった。そして慈悲深い方はこう仰せになっておられる、『誘惑する者に配慮してはならないし、彼の罪を秘密にしてはならない』⁷⁷と。それどころか、イエシュの場合、事情は違っていた。というのは、奴は統治機関と関係が近かったからだ。

ラビたちはこう教えた。イエシュには、マタイ、ナカイ、ネツェル、ブニ、トダという五名の弟子たちがいた。マタイは連れ出された時、彼らに言った、「マタイは処刑されなければならないか？ まさに『私はいつ [マタイ] は来て、神の前に出頭するのか？』⁷⁸と書かれているではないか」と。彼らは彼に言い返した、「その通り。マタイは処刑されなければならない。『いつ [マタイ] 彼は殺され、彼の名前は没落するだろうか？』⁷⁹と書かれているからだ」と。ナカイは連れ出された時、彼らに言った、「ナカイは処刑されねばならないか？ まさに『罪のない者たち [ナキ] と義人を殺してはならない』⁸⁰と書かれているではないか？」と——その通り。その答えはこうだ。「ナカイは処刑されなければならない。『ナキはひそかに殺害を行う』と書かれているからだ⁸¹。ネツェルは連れ出された時、言った、「いかにしてネツェルは処刑されねばならないか？ まさに『若枝 [ネツェル] がその根から突然現れ出るであろう』⁸²と書かれているではないか？」と。彼らは彼に言い返した、「その通り。『しかし、お前は、嫌悪された若枝 [ネツェル] のように、お前の墓から外に投げ捨てられてしまっているからである』⁸³と書かれているからである」と。ブニは連れ出された時、言った、「いかにしてブニは処刑されねばならないか？ まさに

『イスラエルはわが子 [ベニ], わが初子』⁸⁴と書かれているのではないかと。彼らは彼に言い返した, 「その通り。ベニは処刑されなければならない。『私はあなたの初子 [ビネカー] を殺そう』⁸⁵と書かれているからだ」と。トダは連れ出された時, 言った, 「いかにしてトダは処刑されなければならないか。まさに『感謝の捧げもの [トダ] のための詩篇』⁸⁶と書かれているのではないかと。彼らは彼に言い返した, 「その通り。トダは処刑されなければならない。『感謝の捧げもの [トダ] をつぶす者は誰でも私をあがめる』⁸⁷と書かれているからだ」と。

これら五人の弟子たちの中で, 上記三福音書に言及されている弟子たちの名前と一致しているのは「マタイ」だけである。他の四人については全く一致していない。新約聖書に登場する弟子たちの名前と一致させようとする動機が『サンヘドリン』(43a)には基本的に欠落している。しかし, そのことは重要な問題ではない。そもそも, この『サンヘドリン』(43a)における弟子描写には歴史的価値はない。むしろ, 重要な観点を提供しているのは, この弟子描写の論争的性格である。これについては, プリンストン大学のユダヤ学者ペーター・シェーファーの研究⁸⁸が詳細に紹介している。ペーター・シェーファーによれば, 人名とヘブライ語の単語との語呂合わせが駆使されているだけでなく, 処刑される弟子たちの運命がイエスの苦難を連想させるように描写されている。以下, 若干の補足を加えながら, ペーター・シェーファーによる議論の再構成を紹介する。

たとえば, 「マタイ」という人名が, 「いつ」を意味するヘブライ語の疑問詞「マータイ」と語呂合わせになっている。そこで引用されている同じ詩42篇10-11節(=「わたしはわが岩なる神にいう, 『何故あなたはわたしをお忘れになったのか。何故敵のしいたげによってわたしは悲しみつつ歩くのか』。わが骨も砕けるばかりにわたしの仇はわたしをあざけり, 終日お前の

神はどこにいる、と言いつづける」)は、嘲りと恥辱を受けながら十字架に付けられたイエスの姿を描いた各福音書の場面(マタイ27章39-44節/マルコ15章29-32節/ルカ23章35-37節)を思い起こさせるものがある。「わたしのあだは骨も砕けるばかりに」という表現はイエスの足の骨を折ろうとする場面(ヨハネ19章31-34節)を、そして、「何ゆえわたしをお忘れになりましたか。何ゆえわたしは敵のしいたげによって悲しみ歩くのですか」という嘆きは十字架上のあの有名な叫び「わが神よ、わが神よ、なぜ私を見捨てたのか」(マタイ27章46節、マルコ15章34節)をそれぞれ思い起こさせてくれる。これらのことから、ペーター・シェーファーは、イエス理解をめぐるキリスト教側とユダヤ教側との議論の再構成を次のように試みている。すなわち、前者は、「わたしのことは好きなようにするがいい、処刑しても構わない。天の神の御前にわたしはすぐに現れる、すなわち、死者の中から甦る」という立場に立ち、後者は、「いや、マタイ/イエスは絶対に死なねばならない。それだけではない。彼の名は滅びる、すなわち、彼は完全に忘れ去られるのだ。マタイ/イエスの復活はないのであるから、イエスを信じ続けている者たちの共同体もないのだ」という立場に立つ。イエスを救済者とするかどうかをめぐる、ユダヤ教とキリスト教との間に決定的かつ根本的違いがこの論争に色濃く反映されていると想定される。

ペーター・シェーファーはさらに、「ナカイ」の場合、「ナカイ」という弟子名と、「罪なき人」を意味するヘブライ語の「ナキー」(=「清廉潔白な」)——「ナカイ」とも読むことができる——とが語呂合わせになって、この「ナカイ」は無実のイエスというイメージと重なるとする。実際、共観福音書の受難物語では、ピラトは、「彼(=イエス)はどんな悪事を働いたのか」と問うている(マルコ15章14節/マタイ27章23節/ルカ13章22節)。ヨハネ18章30節は、「もしこの人が悪事を働かなかったなら」という言葉を人々の口に上らせている。また、「また、ピラトが裁判の席についていると、彼の

妻が人を彼のもとにつかわして、『あなたとあの義人には何事もあってはいけません。私はきょう夢で、あの人のゆえにさんざん苦しみましたから』と言った』(マタイ27章19節)と記されているように、ピラトは、無実の、すなわち、「義人」イエスを処刑したくなかった。「義人」に相当するギリシア語は「ディカイオス」、ヘブライ語は「ツァディーク」であり、上記の出23章7節においては、「罪のない人」(ナキー)と並んで使用されている。一方、ユダヤ人たちは、新約聖書の各福音書の記述とは違って、イエスは命乞いをしたと解釈し、詩10編8節における「殺す」を「殺される」と読み替えた。つまり、「ナカイ」(=「無実の者」「罪なき者」)と同定されるイエスは殺された。ラザルス・ゴールドシュミットのドイツ語訳版テキストの注によれば、ここでは、「ナキ」という語は主格として用いられており、「彼は殺人者だから、処刑されなければならない」という趣旨に理解されている⁸⁹。ユダヤ教の理解では、イエスの死は、義人の死ではなく、殺人者の死なのである。

「ネツェル」の場合、「ネツェル」という弟子名と、「若枝」を意味するヘブライ語「ネツェル」と語呂合わせになっている。イザヤ11章1節(=「エッサイの株から一つの芽が出、その根から一つの若枝が生えて実を結び」)において言及されているこの「若枝」は、キリスト教ではメシア論的に解釈され、マタイ1章の系図に示されているように、イエス——「ダビデの子、イエス・キリスト」——はダビデの家系に連なるとされる。それに対して、ユダヤ人たちは、イザヤ14章19節(注83参照)を引用して、この若枝を「踏みつけられた死体」と解する。さらに、それに続く20-21節(=「お前は合わせられることもない。お前はおのれの国を滅ぼし、おのれの民を危めたからである。悪者の裔は永久に言の端にもかかけられぬ。彼の子らのために屠り場をしつらえ、その先祖の罪のために！ 彼らはふたたび興って地を継がず、地の面に町々を満たすこともない」)も視野に入れて、ペー

ター・シェーフアーは、ユダヤ教側の解釈を次のように再構成する。

ネツェルは、ダビデの家系ではなく、野ざらしにされる「忌むべき若枝」(ネーツェル・ニテアーブ)である。ユダヤ教出版協会発行『ヘブライ語-英語対訳タナハ』⁹⁰は、聖書後時代のヘブライ語の用法に従って、「忌むべき若枝」(ネーツェル・ニテアーブ)を“loathsome carrion”(=「忌まわしい腐った死肉」)と訳している。七十人訳では、この表現は、“nekros ebdelugmenos”(=「腐った死体」)と訳されている⁹¹。「剣で刺された者」は、ヨハネ19章34節(=「しかし、兵卒たちのひとりが自分の槍でそのわき腹を突きさすと、すぐ血と水とが流れ出た」)を暗示している。「自分の国を滅ぼし、自分の民を殺した」(イザヤ14章20節)イエスは死ぬだけではなく、極悪人以下のひどい野ざらし状態で放置される。それが、偶像礼拝にイスラエルの民を誘惑したことのなれの果てである。イザヤ14章21節に「ふたたび興って地を継がず、地の面に町々を満たすこともない」と預言されているように、イエスの滅びの運命は、イエスに従った者たちにも降りかかる。イエス同様、イエスの弟子たちも復活することはない。要するに、バビロニア・タルムードは、マタイ28章18-20節(=「私には天においても地上においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたたちは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって彼らに洗礼を授け、私があなたたちに命じたいっさいのことを守るように彼らに教えよ。そして見よ、私は世の終りまで、いつもあなたたちと共にいるのである」)の世界宣教命令と真っ向から食い違う主張を掲げ、イエスのメシア性を否定し、そのメッセージも生きて働いていないとする。

「ブニ」の場合、「ブニ」という弟子名と、「わが子」を意味するヘブライ語「ベニ」と語呂合わせになっている。ブニは、「そこで君はパロに言いなさい、『こうヤハヴェは言われた、イスラエルはわが長子である』」と出4章22節に書かれているから、処刑されないと考える。しかし、裁判官たち

は同4章23節(=「わたしが君にわが子を去らせ、わたしに任せさせよ、と言ったのに、君は彼を去らせることを拒んだ。見よ、わたしは君の長子を殺そう」と))を引き合いに出す。「わが子」は詩2編7節の「わたしもヤハヴェの定めを語ろう。彼はわたしに言われた、『君はわが子だ、今日わたしは君を生んだ』」を想起させ、弟子ブニとメシアとしてのイエスのイメージが重ねられている。詩2編7節の「君はわが子だ、今日わたしは君を生んだ」という一文は、そのメシア的含蓄のゆえに、新約聖書のいろいろな箇所——イエスの受洗時における天からの声⁹²、変容時における天からの声⁹³、ルカによって再構成されたピシディアのアンティオキアでのパウロの説教(言行録13章16節後半-41節)における一連の旧約聖書の引用(同13章33節)、メシア性を数珠つなぎ的な旧約聖書引用で論証しようとしている『ヘブル人への手紙』(以下、ヘブルと略記)1章5節、5章5節)においても見出される。

ブニはまた、出4章22節を根拠に、自らを「長子」とするが、これはイエスが神の長子、すなわち、あらゆる被造物の長子⁹⁴とか、死人の中からの長子⁹⁵であるというパウロ学派の主張ともつながる。イエスは、御使たちが拝すべき「世界に導き入れられた長子」(ヘブル1章6節)とも言われている。イエスは「死人の中からの長子」であることの論理的帰結として、イエスにつき従う弟子たちは彼を通して生きることになる。パウロはこのことについて、第一コリント15章20-22節において次のように述べている。「しかし事実、キリストは眠っている者の初穂として、死人の中からよみがえったのである。それは、死がひとりの人によってきたのだから、死人の復活もまた、ひとりの人によってこなければならぬ。アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである」。イエスを「長子」とする考え方は、ローマ8章29節(=「神はあらかじめ認識している者たちを、しかも彼の御子の姿と同じ形になるようにあ

らかじめ定めた。それは、御子が多くの兄弟たちの間で長子となるためである」)にも見出される。イエスに従う者たちは、「これらの肉の子たちが神の子たちなのではなく、むしろ約束の子たちが神の子たちとして認められるのである」(ローマ9章8節)とか、「ホセア書においても言っているように、『私は私の民でない者を私の民と呼び、愛されなかった女を愛された者と呼ぶであろう』」(同9章25節)などと記されているように、古いイスラエルではなく新しいイスラエル、肉によらない、約束による神の子供たちである。キリスト教が「古いイスラエル」に取って代わったとする交替主義に対して、ユダヤ教側は、これを退け、上記の出4章23節に依拠して、イエスは神の長子ではなく、イスラエルを滅ぼそうとした悪者ファラオの長子であると大胆に主張する。ペーター・シェーファーの再構成によれば、「メシア自称者は、イスラエルの最悪の抑圧者の子孫、イスラエルの最大の敵の子孫」である。

最後の「トダ」という弟子名は、「感謝の捧げもの」を意味するヘブライ語の「トダ」と語呂合わせになっている。この場合も、キリスト教の教義と、それに対するユダヤ教側の反論が反映されている。これについて、ペーター・シェーファーは次のように再構成する。詩100編1節の表題「感謝のための歌」が示しているように、弟子トダは、自分はイスラエルの感謝の捧げものであるから、処刑されるのではなく賛美されると主張する。しかし、裁判官たちは、これに反論し、詩50編23節の「感謝をささげものにする者はわたしを崇める者」を引用する。彼らは、「トダ」を処刑する者たちが神をあがめるという意味にこれを解する。彼らは、贖罪に関連する新約聖書の一連の構想——「世の罪を取り除く」新しい過ぎ越しの子羊⁹⁶、「神へのかんばしいかおりのささげ物、いけにえ」⁹⁷、「彼の血による贖罪の供え物」⁹⁸、大祭司イエス論⁹⁹——を認めない。ユダヤ教の立場では、イエスの犠牲は、浄罪や償いをもたらすヘブライ語聖書の祭儀的な捧げものではなく、イエス

の処刑、それと重ね合わせられている弟子トダの処刑は、神を敬うことであり、それがユダヤ教の正しさの証明である。

しかしながら、聖書の言葉をめぐる法解釈論争によって五人同時に死刑判決が下されることは実際には考えられず、この『サンヘドリン』(43a)は史実ではない。新約聖書の各福音書ではイエスの弟子たちの数が「十二人」とされ、この『サンヘドリン』(43a)ではイエスには五人の弟子たちがいたとされているのである。両者とも史実ではない。ルカ10章1節が伝える「七十人」という数字も同様に史実ではない。『サンヘドリン』(43a)における「五人の弟子」の部分は、ミシュナーに収録されなかったバライタとして伝承されたと言われているが、パレスチナのラビたちに遡る古い伝承を含んでおり、ユダヤ教とキリスト教との間における真剣な議論を反映していると思われるであろう。そこには勝ち負けはない。この議論は、それぞれの立場の違いをそのまま表している。

なお、「ネツェル」を、「キリスト教徒」を意味する「ネツェリーム」とする説、シモン・ペトロの兄弟「アンデレ」と結びつける説、「ブニ」を「ニコデモ」、あるいは、ゼベダイの子ヤコブの兄弟「ヨハネ」の転訛とする説、トダをレバエウスと呼ばれるタダイとする説など、人物名の起源をめぐるいろいろな解釈例をヨーゼフ・クラウスナーは紹介しているが、どれも確実とは言えない¹⁰⁰。

3. 『イエウーの書』と『ピスティス・ソフィア』

三世紀起源とされる『イエウーの書』は、十八世紀にイギリス人医師アスキューがロンドンの書店で購入し、1785年大英博物館の管轄に移った写本『ピスティス・ソフィア』において、「イエウーの二つの書」として言及されている(158.18以下, 228.35)。その正式名は、第一文書の末尾に記されている『偉大な秘密の言葉による書』であり、「これは、選ばれた種族に父の

いのちに至る安息に入っていく道を示す隠された秘儀を介した見えざる神の知識の書」という書き出しで始まる。この『イエウーの書』は、1769年スコットランド人ジェイムズ・ブルースがエジプトで入手した写本に収められており、1848年以来オックスフォード大学ボードレイ図書館に所蔵されている。復活のイエスが天上の秘儀を弟子たちに伝授するという設定になっている。

『イエウーの書』の「イエウー」という名称は、その中に書かれている画像では、「イエウー、真実の神、これが彼の名前である」(Ieou pno[ute]ntalethia pai pe pefran)¹⁰¹と説明されている。「イエウー」(Ieou)は、ナグ・ハマディ文書に収められている『エジプト人の福音書』においては“*Ieou*”という綴りで見出される(3.44; 4.54)。その「イエウー」(Ieou)の語源は、コプト学の権威ベントレイ・レイトンによると、「神」(ヤハウエ)を意味する“*iaō*”を呪文として唱えていたことに由来するという¹⁰²。真偽のほどは不明であるが、こういう呪文の背景には礼拝儀式が絡んでいると推測される。

『イエウーの書』では、「マタイとヨハネ、ピリポとバルトロマイとヤコブ」という「五弟子」が「使徒たち全員」として挙げられている。そして、彼らは、秘儀に関するイエスの解き明しの言葉に対して以下のように答えている¹⁰³。

… 慰め主の御霊が完全であるように、あなたたちもまた聖なる慰め
の主の御霊の自由を通して完全となるであろう」と語るイエスに対して、
彼らは声を合わせて、「主イエスよ、生ける者なる汝よ。生ける者の善は、
生ける者が光輝いているその知恵と姿を見出した者たちの上に大きく広が
っています——おお、光よ。光はいのちの光を受けるまでわれわれの心を
照らした光の中にあります——おお、真実の言葉よ。真実の言葉は、知識
を通して生ける者なる主イエスの隠された知識をわれわれに教示しま

す……。

「声を合わせて」とイエスに呼びかけている点は、礼拝儀式的場面を想像させる。

エウセビオス『教会史』(3.39.4)によると、二世紀前半、小アジアのフリュギアのヒエラポリスの教会の監督パピアスは、『主の言葉の説明』の序文において、「十二」という数字を保持せずに、弟子たちを「アンドレ、ペテロ、ピリポ、トマス、ヤコブ、ヨハネ、マタイ」と総称的に縮小している。このことを考慮に入れると、『イエウーの書』に記されている上記の「五弟子」が弟子全体を表わしていると考えられることもできる。しかし、『イエウーの書』の著者は、「十二弟子」という表象と「十二弟子」の具体的な名前を著者が知らなかったとまでは言えず、卓越した弟子たちの名を挙げた可能性もあろう。

一方、『イエウーの書』と同じ思想を共有しているものの、『ピスティス・ソフィア』(4・136)では、それとは異なる弟子名簿と描写が見られる。

イエスが祈願している間、トマス、アンデレ、ヤコブ、そして、熱心党員シモンは西側にいて彼らの顔を東の方に向けていた。そして、ピリポとバルトロマイは南側にいて北方に向いていた。そして、弟子の残りの者たちと女弟子たちはイエスの背後にいた。しかし、イエスは祭壇に立っていた。そして、イエスは、全員が麻布の衣服を身にまとった彼の弟子たちと共に、世界の四隅に体を向け、「イェオー、イェオー、イェオー」と唱えながら、祈願を捧げるのであった¹⁰⁴。

『ピスティス・ソフィア』では、マグダラのマリアが質問者としてしばしば登場しているが、弟子集団は、「六弟子」、他の弟子たち、女弟子たちによ

って構成されている。そこには、新約聖書の四福音書の「十二弟子」名簿では筆頭者として名前を挙げられている「ペテロ」の名は記されていない。また、イエスが弟子たちと共に「イッオー、イッオー、イッオー」と唱えている様子は、礼拝の場を想像させる。

「十二弟子」の縮小は、正統派教義の擁護者、サラミスの主教エピファニウス（315頃-403年）が『薬籠』（30.13.2以下）において言及している二世紀成立のユダヤ人キリスト教文書『エピオン人福音書』¹⁰⁵にも当てはまる。そこでは、ヨハネを筆頭者とする「八弟子」名簿が記載されている。しかし、「十二使徒」という言い方は保持されている。

イエスという名の者がいた。そして彼は約三十歳であった。彼がわれわれを選んだのであった。そして彼はカペナウム入りをし、ペテロと呼ばれるシモンの家に入って行き、彼の口を開いて言った、「ティベリア湖畔沿いを通りかかり、私は、ゼベダイの子たち、ヨハネとヤコブ、そして、シモンとアンデレとタダイと熱心派シモンとイスカリオテのユダを選び、そして、取税所に坐っていたあなたを、マタイを呼んだ。そして、あなたは私に従った。さて、私は、あなたたちがイスラエルのあかしのために十二使徒となることを望んでいる」¹⁰⁶。

4. 「十一弟子」

新約聖書の福音書の素材をしばしば使用しているため、「福音書」の類型に通常入れられる二世紀成立の外典文書『使徒書簡』は、復活のイエスと使徒たちの対話というグノーシス文獻に顕著な文学的虚構を用いている。その冒頭で、「十一弟子」の著者としての権威が主張されている。「ヨハネ、トマス、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、ナタナエル、ゼロテ党員ユダ、ケファ」の「十一弟子」が四方八方の諸教会に向けて

書き、主イエス・キリストに関することを宣言し、伝えるという触れ込みの文書が『使徒書簡』であり、グノーシスとの対決を意図している¹⁰⁷。

この「十一弟子」名簿に類似する名簿を含んでいるのが、三世紀にシリアで成立した『ディダスカリア』（使徒戒規）である。そこには、「われらの救い主、われらの主イエス・キリストの命令によって」集結したのは、「ヨハネ、マタイ、ペテロ、そしてアンデレとピリポ、そしてシメオン、そしてヤコブ、そしてナタナエル、そしてトマス、そしてケファ、バルトロマイ」¹⁰⁸の「十一弟子」である。『使徒書簡』の「十一弟子」名簿と比較すると、『ディダスカリア』の「十一弟子」名簿は、若干の違いが認められる。名前が挙げられている順番に関して言えば、「トマス」が前者では第二位、後者では第九位、「ヤコブ」が前者では第五位、後者では第七位、「ピリポ」が前者では第六位、後者では第五位、「バルトロマイ」が前者では第七位、後者では第十一位、「マタイ」が前者では第八位、後者では第二位、「ナタナエル」が前者では第九位、後者では第八位、「ケファ」が前者では第十一位、後者では第十位にそれぞれ位置している。人物名に関して言えば、後者の第六位に位置する「シメオン」が前者にはなく、前者の第十位に位置する「ゼロテ党員ユダ」が後者にはない。しかし、これらの違い以上に注目されるのは、ヨハネが筆頭者であること、ナタナエルとケファが登場していることが共通していることである。ヨハネが筆頭者であることは、上記の『エビオン人福音書』の「八弟子」名簿にも当てはまる。

5. 『マニ教詩篇』

340年頃に遡るとされる『マニ教詩篇』¹⁰⁹では、二種類の弟子名簿が記載されている。「福音の真珠の宝石イエス」の名が冒頭に置かれている一つの弟子名簿においては、「十二弟子」の内、「十一弟子」の名前が人物紹介付きで記されている——「揺るぎない土台は使徒ペテロ」を筆頭に、「[強い]

心……双子アンデレ」,「舟……童貞ヨハネ」,「兄弟……彼の兄弟でもあるヤコブ,そして彼は雨あられと飛来する石で死んだ」,「忍耐強いピリポ,彼は人食い族の地にいる」,「煩いから〈離れた〉しるしは老人バルトロマイ,彼はその日の食料を携行しない」,「羊……熱心党シモン」,「利益を見出す商人トマス,彼はインドの地にいる」,「従順な弟子,穏やかなアルパヨ」,「神を告発するユダ,金銭を愛する者」,「良き最後は収税人マタイ」——。これら十一名に加えて,「律法の斧,使徒パウロ」の名が挙げられている。上述の共観福音書の各弟子名簿とは違って,人物描写がかなり詳しいことは注目に値する。さらに,その後,彷徨う他の十一弟子たちを漁るために網を打つ「マリウム」(=マグダラのマリア),彼女の姉妹でもある「楽しいマルタ」,「忠実な羊サロメとアルセノス」,「肉体を軽蔑する者,神を愛する者テクラ」,「蛇を恥じ入らせる者,忠実なるマクシミラ」,「彼女の姉妹でもある良き知らせの受取人で獄中にあるイフィダマ」,「戦いの闘士,忍耐強いアリストブラ」,「統治者たちの心を引きつけ,他の者たちに光を与える貴婦人なるエウブラ」,「主人を愛するドゥルシアネ」など,女性たち十名の名前が言及されている。この後に,「われわれに吹きつける北風はわれわれの主マニ」という言い回しが続く。「十一弟子」と十名の女性集団が,「福音の真珠の宝石イエス」と「われわれに吹きつける北風はわれわれの主マニ」との間に挟まれる仕方と言及されている。

共観福音書の伝える各弟子名簿と『マニ教詩篇』のそれを比較すると,人数に関して言えば,前者が「十二人」,後者が「十一人」であること,名前に関して言えば,後者では「タダイ」の名はなく,「アルパヨの子ヤコブ」が「アルパヨ」となっている。しかし,『マニ教詩篇』におけるこの弟子名簿においては,共観福音書の伝える各弟子名簿と著しく異なって,少なからぬ数の女弟子たちの名前が言及され,しかも彼女たちの指導者的な役割が男性指導者たちに匹敵するほど際立たされているにもかかわらず,W.バウ

アーは、この等閑視できない事実に触れていない。『マニ教詩篇』における女弟子名簿は、「マグダラのマリア」を筆頭者とするマルコ15章40-41節（/マタイ27章56節）や、著者の編集による要約的報告ルカ8章1-3節に含まれている女性集団の名簿において言及されている名前——前者はガリラヤからイエスに従ってきて仕えた「マグダラのマリア、小ヤコブとヨセとの母マリア、サロメ」の三名¹¹⁰、後者は悪霊を追い出され、病気を癒された「マグダラと呼ばれるマリア、ヘロデの家令クーズの妻ヨハンナ、スザンナ」の三名に言及している——の数を上回っており、人物描写も詳細である。ただし、大勢の女性たちがイエスと共に上って来たことを述べているマルコ15章41節の一文¹¹¹からすれば、イエスに従った女性の数は実際多かったと推定される。それゆえ、『マニ教詩篇』における女弟子名簿は、女性信奉者が多くいたというイエスの活動の一端が記憶され、長く伝承に留められていることを反映させているように思われる。

もう一つの名簿は、上述の名簿とも異なる。そこでは、人となり、人の姿を受け入れ、奴隷の衣装を受け取った「生ける神の御子」によって見出された「十一弟子」の名前が挙げられている。彼らは、「教会の土台ペテロ」、「最初の聖なる像アンデレ」、「童貞の鑑ヨハネ」、「新しい知恵の泉ヤコブ」、「忍耐力に優れたピリポ」、「愛の薔薇バルトロマイ」、「インドに届いた甘い香り、他のトマス」、「主の実弟、他のヤコブ」、「血気盛んな熱心党シモン」、「信仰の王レビ」、「(パンの)かけらを与えられたユダ」といった面々である。この名簿には、共観福音書の各弟子名簿と違って、「タダイ」の名も「マタイ」の名もない。これら選ばれた「十一弟子」たちに続いて、「知恵の霊マリウム」(=マグダラのマリア)、「分別の息マルタ」、「平和の恵みサロメ」、「真理の花冠を備えられたアルシノエ」といった選ばれた四名の女弟子たちの名前が挙げられている。彼女たちの名は、ナグ・ハマディ文書に収められている『ヤコブの黙示録I』(40.25-26)の復元された読みに見られる¹¹²。

この名簿には、先の名簿には見出されない「アルシノエ」の名が記されているが、先の名簿に記されている「パウロ」の名は欠けている。『マニ教詩篇』における二つの弟子名簿は、男性弟子の名前とその人物描写、及び、女弟子の数とその人物描写において違いが少なからず存在する以上、両弟子名簿は、恐らく別系統の資料に由来するとみて差し支えないと思われる。これら二つの弟子名簿とも、マニ教の典礼式文の一部と考えられる。

6. 数名集団

「十二」という数字は他の文献資料でも保持されているわけではない。不完全な形で終わっている二世紀半ば成立の異端文書『ペテロ福音書』¹¹³ (59) では、「そして、私シモン・ペテロとわが兄弟アンデレは、われわれの網を取って、海へと出て行った。そして、われわれと一緒にアルパヨの子レビがいた。この者を主は……」¹¹⁴とある。この箇所では、上述の側近グループ（ペテロ-ヤコブ-ヨハネ-アンデレ）は登場せず、側近グループには属していないレビの名が記されている。このことは、側近グループの存在に対する関心が高くはないヨハネの傾向と調和するかもしれない。この箇所が復活のイエスの顕現の場面であることから、途中で切れているこのテキストは、復活のイエスの弟子たちに対する顕現を描いたヨハネ21章1節以下の物語が続いていたと思われる。

7. 「九百人強盗団」集団

護教論者アルノピウスの弟子、北アフリカ出身の教父ラクタンティウス（240頃-320年頃）は、ディオクレティアヌス帝により修辞学者として招かれ、キリスト教をローマの公認宗教に加えたコンスタンティヌス大帝（306-337年在位）の息子の家庭教師となった。彼の著した『聖なる教え』（*Divinarum Institutionum Libri*）は、キリスト教に関する最初のラテン語

の体系的叙述であるとされている。プラトン、アリストテレス、エピキュロスなどの哲学の教えを高く評価する文脈において、ラクタンティウスは、「彼は、キリスト自身がユダヤ人たちに敗走させられ、九百人もの集団を集めて、略奪行為を働いたと主張した」と述べている(5.3.4)¹¹⁵。この一文については、旧聖書学者ウィリアム・ホーベリ(ケンブリッジ大学教授)がその起源に迫る論考(「古代キリスト教の議論における略奪者キリスト」)を発表している¹¹⁶。

最初に、確認しておかなければならないのは、この一文で言及されている「彼」が何者であるかが不明であるということである。この「彼」が、ソッシアヌス・ヒエロクレス(Sossianus Hierocles)であった可能性をウィリアム・ホーベリは指摘する。ヒエロクレスは、ディオクレティアヌス帝(284-305年在位)のもとでキリスト教徒を激しく迫害し、ビュテニア(303年)とアレクサンドリア(307年)で執政官職にあった。エウセビオスは、『ヒエロクレス反論』(1)において、ヒエロクレスの『真理を愛する者』(*Philalethes*)の構想や言葉が他からの恥ずべき盗用であると非難しているが¹¹⁷、上記の一文がヒエロクレスの『真理を愛する者』に由来するという確証はない。

上記の一文が伝えているのは、1)キリストがユダヤ人から排斥されたこと、2)集団を結成したこと、3)略奪行為を働いたこと、の三点である。イエスがユダヤ人から排斥されたことは、ヨハネ5章16節¹¹⁸、18節¹¹⁹、11章54節¹²⁰、マルコ3章6節などに描写されている。ウィリアム・ホーベリによれば、『トルドート・イエシュ』——中世にまとめられたユダヤ教側のイエス伝説——においては、イエスがイスラエルから逃れ、質の悪い弟子たちの集団を結成したとされている。こういう弟子像には、ユダヤ人たちの主張——ヨハネ18章30節(=「もしこの人が悪事を働かなかったなら、あなたに引き渡すようなことはしなかったであろう」)——が色濃く刻印され

ているであろう。これは、「穏やかで上品、教養のある」というキリスト教に対する一般的イメージからは程遠い。また、イエスの集団が不特定で多人数であるというイメージは、共観福音書の各福音書が言い回しは異なるものの、一致して伝えており（マルコ3章7節/マタイ4章25節/ルカ6章17節）¹²¹、ケルソスに対する上述のオリゲネスの反論にも受け継がれている。ラクタンティウスが伝えている上記の一文は、イエスとユダヤ人との反目関係に関する現行の新約聖書の各福音書の異なる扱い方を受容した伝承の発展段階の一例とウィリアム・ホーペリは見る。

8. 「無学で素人」という弟子像

宗教体験はそもそも、他者の介入なしに直接的に根源に触れるようなこと——パーソナルなもの——である。A. Q. モートン¹²²とジェームズ・マクレマンは、既成のキリスト教会が変化する時代に対応できないまま硬直化していることを指摘した上で、次のように述べている。

宗教は、いのちの賜物の形で与えられる。宗教は、外側から獲得されるものでもなければ、授与されるものでもない。人間は電気の供給を管理する側によって電気を止められるが、宗教は電気のように間接的に媒介されるのではない。宗教は直接の体験によるものであるので、その体験者のみが自分自身を破門できる¹²³。

実際、パーソナルな霊的体験を書き記した言葉は、新約聖書二十七文書を含む初期キリスト教文書の随所に数多く残されている。しかし、霊的でパーソナルな宗教体験を文字で書き記す以前に、それを口で語るという要素があるはずである。それだけではなく、口で語られたものを文字化する時に意味の転換が起きる可能性がある。

イエスの弟子たちや他の信者たちは、イエスへの生々しい記憶を通してイエスと共に生きていたので、正典を必要としなかった。彼ら・彼女たちは、書き記されたものによってではなく、パーソナルなものによって突き動かされて生きていた。蛭沼寿雄氏が適確に指摘しているように、「正典」という意識を最初から持っていたわけではない。

新約正典は始めから意図されて作られたものではない。否、むしろ、作る必要がなかったのである。最初期のキリスト信徒にとって、文書の新約聖書というが如き観念ほど縁遠いものはなかった。イエス自身はもちろん何も書き残さなかったし、弟子たちにも書くように命じなかった¹²⁴。

この指摘は、弟子集団の原像を考察する上で示唆的である。上述のように、イエスのもとに押し寄せてきた「群衆」または「人々」が弟子集団の原像であり、その中から一部の者たちが弟子化されていく段階が想定された。蛭沼氏の指摘の通り、弟子化されてからも、そして、イエスの死後も、弟子たちは、読み書きから遠い現実を生きていたことは十分にありうることである。その段階でも、イエスの生前と同様、イエスの残したメッセージや生活実践は影響を与え続けていたと思われる。種々様々なイエス伝承は、そういう事態を随所に反映させているであろう。

しかし、イエスの諸々の言葉やイエスにまつわる物語が収集されるようになり、「福音書」文学が成立することになった。その過程は、イエスの生きた生の現実から次第に離れていく過程でもある。文字はまた権力者側の搾取の道具となりうる¹²⁵。また、プラトンは、『パイドロス』(274-275)¹²⁶において、ソクラテスの口を介して、知者であると思ひ込む付き合いにくい人間を生み出す文字の有害性に注意を促している。キリスト教という宗教もまた、いろいろな諸派が存在していたにもかかわらず、文字の有害性と危険性

を抱えながら、文字で多様な信仰内容を統合しつつ、地中海世界に広まっていくようになったとも言える。

イエスの死後三百数十年経過してから、アレクサンドリアの監督アタナシオス（295-373年）の『第39復活節書簡』（367年）は、新約聖書二十七文書を「正典」としている。この基準がカルタゴ宗教会議（397年）において正式に承認された。しかし、当時、実際どれだけの多くの人たちが読むことができたか。どれだけの人たちが実際に書くことができたのか。今日重視されている「リテラシー」（読み書き能力）がどの程度広まっていたのか。一定の文学様式で書き記された文書としての「福音書」なるものを読む必要がどの程度あったであろうか。当時、一体どの程度の人々がこれらの文書を読むことができたのか。初期キリスト教においては、「読む」という行為はそもそもいかなる事態であったのか。読む訓練を経てきた文人や哲学者はともかくも、それ以外の人々は読む必要があったのか。

われわれはここで「無学」とか「読み書き能力がないこと」に対して、二十一世紀の現代に見られる自国文化中心主義の価値基準を当てはめるべきではないであろう。というのは、一世紀の地中海世界の法律文書においては、「読み書きができない」ことを表す語（アグランマトス）自体は社会的汚名ではなく、その語そのものには軽蔑的な意味合いはないからである。

初期キリスト教における読み書き能力の欠如に関連する証拠資料として、たとえば、言行録4章13節を挙げることができる。この箇所には描かれている弟子たちの姿は、後の弟子像に影響を与えていくことになった。

人々はペテロとヨハネとの大胆さを観察し、また、ふたりが無学で普通の人たちであるとわかって、彼らのことを不思議に思った。

そこでは、癒しの業を行ったことで発生した混乱状態の中で、無学で、専

門家でもないヨハネとペテロが学のある者のような雄弁さをもって語ったので、聴衆が彼らのことで驚く様子が描かれている。「無学」と訳されているのが「アグランマトス」である。しかし、ここでは、この二人の「無学」があからさまに社会的に侮蔑されているわけではないように思われる。また、この語の意味は必ずしも、読み書き能力の欠如に限定されているわけではなく、「文字を知らない」「文書に縁のない」「教養のない」「文学の素養がない」という意味合いもそこに含まれていると思われる。後述するように、「アグランマトス」がラビの訓練を受けていないことを示しているとする解釈もあるが¹²⁷、紀元後二世紀起源のパピルス文書における「アグランマトス」の用例によると、「字を知らない誰某のために私は署名した」という定式文が、証文や手紙に署名する者によって絶えず使用されている¹²⁸。「字を知らないこと」自体が軽蔑されているわけではない¹²⁹。いずれにせよ、「アグランマトス」について負の評価が下されているわけではない。

「アグランマトス」や、それに相当するラテン語の単語“*illiteratus*”——文字通りには「無学の」——は、その意味が漠然としており、明確には定義しにくい。たとえば、ストア派哲学者セネカの「恩恵について」においては、“*litteratus*”と“*illiteratus*”は、その本来の意味に近い用法で用いられているが¹³⁰、共和政ローマ期の政治家、文筆家、哲学者キケロの時代にはその用法は必ずしも厳密ではなかったと指摘されている。これらの語は、古代においても文脈によっていろいろな意味合いで用いられ、その語義の適用範囲は広いと思われる¹³¹。現代においても「読み書き能力」(リテラシー)の意味は曖昧である¹³²。

西洋哲学の源流を形成したプラトンは、読み書きの能力の欠如を言い表すために「アグランマトス」を用いている(『ティマエオス』23a)¹³³。いろいろなことが整えられても、結局、禍が襲ってきて、読み書きできない者たちが残るといふ文脈で同語が使用されている。クセノフォンは、自分から進

んで正しく読み書きしない者と強いられてそうする者のどちらが、より読み書き能力がある (grammatikōteron) のかという問いを立てているが¹³⁴、その場合、教養の欠如の反対語として「グランマティコス」を用いているように思われる。プラトンの弟子アリストテレスは、動物にも「アグランマトス」を適用し、動物を「音節のある言葉のないもの」としている (『動物誌』I.488a.33)¹³⁵。

また、「普通の」と訳された語 (イディオオーテース) 自体も軽蔑の意味で使用されているわけではないであろう。古代アテナイの歴史家トゥキュディデスは、「素人」の意味で使用し、「医者」と対比させている (『歴史』2.48.3)¹³⁶。ここでも、訓練を受けていない、専門家ではない普通の人、という程度の意味で使用されている。上述のポリビウスの『歴史』(I.69.11) は、隊長とは立場が対照的な一兵卒に関連して、「イディオオーテース」を用いている¹³⁷。二世紀ギリシアの旅行家で地理学者パウサニアスは、ギリシアの地誌や歴史、神話伝承を紹介した『ギリシア案内記』(2.13.7) において、「予言者」(マンティス) になる前の「ふつうの人」を「イディオオーテース」と呼んでいる¹³⁸。確かに、ペテロとヨハネは教えるための訓練を受けた専門家ではなかった。彼らは、詩人でもなければ演説家でもなく、哲学者でもなければ医者でもなかった。ドイツ敬虔主義の聖書学者ベンゲルの『新約講解』(*Gnomon Novi Testamenti*, 1742) によれば、「アグランマトス」は、「ほとんど読み書きができない」「洗練されていない」の意味に解し、「イディオオーテース」はなおさら洗練されていない人、すなわち、「漁師」を指しているとするが¹³⁹、これは支持できない。漁師出身のラビもいたことを考慮に入れなければならない。ヨハネの父親ゼベダイは、雇い人がいる網元的存在であったので、必ずしも社会の最下層ではない。ドイツの新約聖書学者ヘンヒェンは、「アグランマトス」が読み書きできない者であるのに対して、「イディオオーテース」は、専門家と区別して、素人を指し示しており、

「教育を受けていない」「平民階級出身者」という意味で「アグランマトス」とは一致すると説明する。ヘンヒェンによれば、著者ルカがここで律法の知識の欠如のことを考えているとは思えない¹⁴⁰

これに対して、英国の新約聖書学者 C. K. バレットは、「アグランマトス」を「律法を学ぶ学者の訓練を受けていない者」と解し、「イディオテーース」の意味も大して変わらないとする¹⁴¹。英国の新約聖書学者 F. F. ブルースも両語の組み合わせを同様に解釈し、これを“uneducated laymen”と訳している¹⁴²。ルター派神学者シュテーリンも同様の見解ながら、もっと踏み込んだ解釈を反映させ、“Sie keine Schriftgelehrten, sondern Laien ware”（＝彼らは決して律法学者などではなく、素人であった）と訳している¹⁴³。アメリカ合衆国のカトリックの聖書学者ジョーゼフ・フィッツミアーは、「アグランマトス」を「無学」「字が書けない」の意に解し、「イディオテーース」を「話すことに熟達していない」の意であると説明する。その場合に引き合い出されているのが、古代誌におけるヨセフスの記述（2.12.2）である。そこでは、モーセが神の召しに恐れおののいて逡巡する出4章の場面が再現されているが、モーセは自分自身のことを「普通の男」（イディオテーース・アネール）¹⁴⁴と評している。これは、パウロが自らの使徒職の弁明に関連して「弁舌が拙い（イディオテーース・ト・ロゴー）」（第二コリント11章6節）と評しているのと同様の意味であるとフィッツミアーは分析する¹⁴⁵。ただし、モーセが自分自身のことを「口も重い、舌も重い」と言い表している出4章10節の七十人訳において使用されている語は、「イディオテーース」ではない。七十人訳は、“ischnophōnos kai braduglōssos”（＝「口がどもり、しかも、話し方がのろい」）と記しており、この言い方は、使徒教父文書に収められている『クレメンスの手紙——コリントのキリスト者へ（一）』（17章5節）——九七年頃成立と推定される——にそのまま採用されている¹⁴⁶。「口も重い、舌も重い」と直訳されているに相当するヘブライ語表現

(ケバド・ペー・ヴ・ケバド・ラーション)には、「声が抑えられ、舌足らずで、どもり、舌がうまく回らない」など、発話行為の困難に関わるいろいろな要素が含まれているであろう。このようなモーセ像の特徴が言行録の問題の箇所におけるペテロとヨハネに当てはまるとは考えにくい。

文字から縁遠く、無学であるという言行録4章13節のイエスの弟子像は、その後の教会教父の著作にも受け継がれ、根強く残っていくことになった。たとえば、上述のギリシア教父ユスティノスが『第一弁明』(39.3)においても「エルサレムから十二名の人々が世界へと出ていき、これらの人々は無教養(イディオータイ)で、語る能力はなかった」と述べているのもその一例である。オリゲネスと並ぶアレクサンドリア学派の代表的な神学者アレクサンドリアのクレメンス(150?-215年)は、『ストロマテイス』(I.45.1f.)において、イエスの弟子たちが「哲学にとっての鍛錬と思われるような技術」¹⁴⁷なしに語ったと述べている。オリゲネスは、イエスの弟子たちが「無学であること」(インスキエンティア)に言及している(『ケルスス駁論』1.62)¹⁴⁸。また、ラテン教父ヒエロニムス(340?-420年)は、弟子の召命物語(マタイ4章18-19節)¹⁴⁹に関連して、彼の注解の中で、「我に従え」とのイエスの声に従い、宣教に遣わされた弟子たちは、「漁師で、字が読めない」(“piscatores et illitterati”)と解説している¹⁵⁰。弟子たちが無学であるにもかかわらず、キリスト教を広めることができたのは神の力を得たからであるとするのが、言葉を駆使する側の教会教父たちの主張であり、弁明である。これら以外に、『偽クレメンス文書』(VII.6)によると、ペテロとアンデレは孤児で貧しい境遇で育ったと伝えられている¹⁵¹。

しかし、上述のように、そもそも古代人は読み書きする必要がどの程度あったのか。読み書きできないということを古代人はどの程度自覚していたのか。ペテロとヨハネというイエスの側近たちが無学であったということが事実であったとしても、彼らは「俺たちは無学者だが、神から力を与えられた

俺たちの説教で福音が前進している」という自己認識を持っていたのか。そういう彼らが大胆に福音を宣教していったとするのは、ドイツの新約聖書学者ハンス・コンツェルマンが明確に指摘しているように¹⁵²、言行録の文学的構成なのである。このように文学として言行録のギリシア語本文を詳細に検討し、言行録の著者ルカをヘレニズム期の一著作家として位置付けた E. プリューマッヒャーは、「神よりもあなたたちに聞き従うほうが神の前に正しいかどうか判断せよ」というペテロとヨハネの発言（4章19節）や、「人間に服従するよりは神に従うのが当然である」というペテロと使徒たちの発言（5章29節）を手がかりとして、「私は諸君よりも神に聞き従おう」（『ソクラテスの弁明』29d）——“*peisomai mallon tō theō ē hūmin*”¹⁵³——というソクラテスの発言がペテロとヨハネなどの使徒たちの発言に反映されているとさえ指摘する¹⁵⁴。われわれがここで再確認しておかなくてはならないのは、こういう非歴史的な文学的弟子像を描いているのは読み書きできる側の著作家ルカであり、また、読み書きの訓練を受けた後代の教会教父たちであるということである。

ところで、「アグランマトス」「イディオオーテース」の訳例を以下に掲げる。これらを概観するだけでも、言行録4章13節の弟子像がどのように現代にまで継承されているかが見えてくるからである。

「無學小民」（＝「学がなく、人民」。『新約聖經』，上海大美國聖經會，1906年），「沒有學問の小民」（＝「学がなく、人民」。『舊新約全書』，聖經公會在香港印發，1962年），「無學の凡人」（文語訳，1887年），「無學の凡人」（ラゲ訳，1910年），「無学な、ただの人たち」（口語訳，1954年），「無学な普通の人」（フランシスコ会訳，1969年），「無学な人間で，全くの素人」（塚本虎二訳，1977年），「無学な普通の人」（新共同訳，1987年），「無学で普通の人間」（荒井献訳，1995年），「文字を知らず，無学である」（田川建三訳，2011年），“*sine litteris et idiotae*”（＝「学識のない素人」。ウルガタ，

5世紀初め)，“unlearned men and lay people” (=「学のない男たち，そして素人の人たち」。ティンダル訳，1534年)，“ungelehrte und einfache Leute” (=「学がなくして無知な人々」。ルター訳，1534年)，“unlearned and ignorant men”(=「学がなく無知な男たち」。King James Version, 1611)，“uneducated, common men”(=「教育を受けていない，普通の男たち」。The Revised Standard Version, 1946)，“indoctos y del vulgol”(=「無学で知識の浅い民衆」。南米のスペイン語圏で読まれている *El Nuevo Testamento*, 1946)，“ongeletternde en eenvoudige menschen”(=「無学で無知な男たち」。オランダ語訳。Bijbel, 1958)，“olärda män urfolket”(=「学のない民衆」。スウェーデン語訳。Bibeln, 1962)，“koulunkäymättömiä ja oppimattoma”(=「学がなくして無知な」。フィンランド語訳。Pyhä Raamattu, 1962)，“uomini senza lettere e idiot”(=「学問がなくして無知な男たち」。イタリア語訳。La Sacra Bibbia, 1961)，“untrained laymen”(=「訓練を受けていない素人の男たち」。The New English Bible, 1961)，“uneducated, ordinary men”(=「教育を受けていない，平凡な男たち」。The New American Bible, 1970)，“obviously uneducated non-professional”(=「明らかに教育を受けていない非専門家たち」。The Living Bible, 1972)，“hombres sin letras y del vulgo”(=「学がなくして，知識の浅い民衆」。スペイン語訳。La Santa Biblia, 1960)，“ordinary men of no education”(「教育を受けていない普通の男たち」。Today's English Version, 1976)，“ungelehrte und einfache Leute”(=「学がなく，無知な人々」。ドイツ語聖書統一訳，Einheitsübersetzung der Heiligen Schrift, 1980)，“d'hommes sans instruction et de gens quelconques”(=「教育のない男たちで平凡な人たち」。フランス語聖書エキュメニカル訳，Traduction Œcuménique de la Bible, 1972年)，“uneducated and ordinary men”(=「教育を受けていない，そして平凡な男たち」。The New Revised Standard Version, 1989)，“unstudierte Men-

schen und Laien” (=「教育を受けていない男たちで素人たち」。ボ・フォン訳, EKK 註解, 1986年) など。なお, コプト語訳——“sōoun nshai an hanidiōtēs”——や, シリア語訳 (ペシッタ, 5世紀初期) ——“lā yādīn sephrā whedyūtē”——はいずれも, ギリシア語本文に比較的忠実に「文字を知らない素人たち」という意味に訳している。『ヘブライ語訳新約聖書』(1979年) では, 「アナシーム・フェシュューティーム・ヴ・ブレティール・ミルマーディーム」という表現が使われ, 「普通の, 教育を受けていない人々」の意に訳している。

とにかく, 古代文献における「アグランマトス」「イディオテース」を分析する際, われわれは, 読み書き能力を前提とする価値体系に基づく現代の社会システムと当時の地中海世界文化との違いを考慮に入れ, 十二分に注意を払わなければならない。これらの語に何か特別な意味を見出そうとすると, かえって初期キリスト教の実態や歴史的文脈からずれてしまう恐れがあるのであろう。

結びに代えて——多様な弟子像の再発見——

パレスチナの鄙びた一隅で起こったイエス運動はユダヤ教の刷新運動であるという有名なテーゼをゲルト・タイセンは立て, 後のイエス研究に深い影響を与えた。さらに, 彼は, 『ソロモンの詩篇』17章において表明されている黙示文学的・民族的メシア待望がマタイ19章28節/ルカ22章30節においては民衆によって代表される支配体制への待望に転換されていると論じる¹⁵⁵。つまり, ゲルト・タイセンによれば, 生前のイエスと, 復活のイエスの顕現を契機として成立した教会との間には思想的切れ目はないことになる。しかし, ユダヤ律法を破るイエス自身の言動は, 王的メシアの審判を描いたユダヤ教黙示文学の枠を超えており, 人々の間に尋常ならざる覚醒を呼び起こしたことは確実と思われる。王侯貴族や宗教指導層と対立し, 世間か

ら「私生児！」(マルコ 6 章 3 節),「気が狂っている！」(同 3 章 21 節)と蔑視されたイエスのもとには大勢の名も無き底辺の人々が押し寄せ、イエスについていった。イエスの行く先々で、被抑圧者たち——小作農、日雇い、娼婦、寡婦、捨て子、債務奴隷、病者など——がイエスに出会った。それがイエスの働きの原風景の重要部分を映し出しているに違いない。そして、「無学」(アグランマトイ)で「普通の人たち」(イディオータイ),すなわち、読み書きに規定されていないイエスの行動に参加した者たちの中の一部が「弟子」として選ばれた。彼らが固定した弟子集団として枠づけられ、名前も挙げられ、名簿に記載されていく。しかしながら、弟子名簿は四福音書間で全部一致しているわけではなく、名前や列挙の順番にも微妙な違いが認められた。異なる名簿の使用の可能性も否定できないのである。いずれにせよ、「弟子」という固定した枠組みは、イエスのもとに押し寄せ、イエスを取り囲む大勢の人々、あるいは、不特定多数の「群衆」より、後の段階に成立した集団である。「弟子」集団よりも先に存在したのは、イエスのもとに押し寄せてきた人々である。こういう事態は、黙示文学的観念では説明できないように思われる。

さらに、注目に値するのは、イエスにつき従った人々の間における女たちの存在である。マルコ 15 章 40-41 節 (=「遠くから女たちが眺めていた。その中に、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリアとサロメがいた。彼女たちはガリラヤにいた時、彼に従い、彼に仕えた。そして、他にも多くの女たちが彼と共にエルサレムに一緒に上って来たのであった」)が示唆しているように、イエスの活動に多くの女性たちが参加したことは確実と思われる。しかし、後代の『マニ教詩篇』などとは違って、四福音書の弟子名簿には女性たちの名前は見当たらない。

それに加えて、イエスによって「弟子」とされた者たちの描かれ方も四福音書間においてさえ均一ではないことを指摘しておかなくてはならない。マ

ルコの同時代史的な鮮明な弟子批判とは対照的に、マタイの場合、イエスと弟子との関係が理想化されていることは、マルコとの並行箇所を検討すれば、明白な事実として指摘できる。批判的弟子像は社会的富裕層を讀者層とするルカにないわけではないが、マルコほどの強烈さはなく、比較的穏やかであると言えよう。ヨハネの場合、並行箇所の多いこれら三福音書とは違って、弟子像は霊的キリストとの関係のあり方に関わっている。それゆえ、ヨハネは、この世に属しながら、本質的にはこの世のものではないとされる弟子の信の持ち方を問題にする。イエスを裏切ったとされる「ユダ」はどの福音書にも悪役として登場しているが、すでに述べたように、年代と共にそのイメージは強化され、「裏切者」として類型化されていく。その極めつけは、『パピラス断片』(3)が伝えるユダ像である。しかも、四福音書間においてさえ、ユダ像は全く一致しているわけではない。ユダの最後についても諸伝承は一致していない¹⁵⁶。要するに、弟子像も弟子の人物像も決して同じではないのである。

上述のように、新約聖書の範囲外の初期キリスト教諸資料、並びに、タルムード資料では、弟子像がさらに多様性を帯び、『偽クレメンス文書』の「再会」のように、論争の跡が窺える資料も存在する。特に、タルムード資料の『サンヘドリン』(43a)には、イエスをメシアとするキリスト教側の主張や聖書解釈を完全否定するユダヤ教側の反駁が深く絡んでいる。弟子名簿が記載されているグノーシス文献やマニ教資料では、礼拝の実践がその背景にあると想定されたが、そこでは女性は排除されていないどころか、ある一定のリーダーシップを取っていることが窺える。さらに、キリスト教批判者たちの主張に見られる否定的な弟子像には、ヨハネに記されている「この者が悪事を働かなかったなら」というイエス像が後代に至るまで深く刻印され、イエスの弟子集団が「強盗団」とまで評されるようになった。

新約聖書内の諸伝承にとどまる限り、イエスに出会い、生き方を変えら

れ、イエスに躓き、しかし、再度立ち上がったという弟子像は揺らぐことはないであろう。しかし、その範囲を超えていくなれば、そのように固定化された弟子像とは異なる多様な弟子像に広範囲に出会うのである。

最後に、本稿は、ユダを除いて、個々の弟子の人物像にまでは言及が及んでいない。それはまた別の課題となる。

〈付記〉

本稿は、2015年度「宮城学院研究助成D」を受けて行われた資料調査・収集の成果に基づいて執筆された。ここに記して感謝する。

- 1 J. Gresham Machen, "History and Faith," in *American Sermons: The Pilgrims to Martin Luther King, Jr.*, The Library of America, 1999, p. 747.
- 2 わが国の代表的なイエス研究としては、次の二点を挙げることができる。荒井献『イエスとその時代』, 岩波書店, 1974年。田川建三『イエスという男——逆説的反抗者の生と死』, 三一書房, 1980年。
- 3 たとえば、オスカー・クルマン著, 荒井献訳『ペテロ——弟子・使徒・殉教者』(新教出版社, 1965年)。
- 4 Walter Bauer, *Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur*. Neubearb. v. Kurt u. Barbara Aland, DeGruyter, Berlin 1988.
- 5 *Rechtgläubigkeit und Ketzerei im ältesten Christentum*, Tübingen, 1934.
- 6 本稿における聖書引用や他資料引用は、特に断りがない限り、私訳に拠る。
- 7 Edgar Hennecke, *Neutestamentliche Apokryphen in der deutscher Übersetzung*, 3., völlig neubearbeitete Auflage, II. Band: *Apostoliches, Apokalypsen und Verwandtes*, hrsg. von Wilhelm Schneemelcher, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1964, s. 11-41. 英語訳版は下記を参照。Edgar Hennecke, *New Testament Apocrypha, Volume Two: Writings relating to the Apostles; Apocalypses and Related Subjects*, ed. by Wilhelm Schneemelcher, trans. by R. McL. Wilson, Philadelphia: The Westminster Press, 1964, pp. 35-74.

- 8 ナグ・ハマディ文書のコプト語テキストは、*The Coptic Gnostic Library: A Complete Edition of the Nag Hammadi Codices (5 vol set)*, ed. by James M. Robinson, Leiden: Brill, 2000) を参照。
- 9 Walter Till (Hrsg.), *Die Gnostischen Schriften des koptischen Papyrus Berolinensis 8502*, Akademie-Verlag, Berlin, 1955, s. 63–79.
- 10 *The Gospel of Judas: Together with the Letter of Peter to Philip, James, and a Book of Allogenes from Codex Tchacos. Critical edition*, Coptic Text ed. by Rodolphe Kasser and Gregor Wurst, Introduction, Translation, and Notes by Rodolphe Kasser, Marvin Meyer, Gregor Wurst, and François Gaudard, The National Geographic Society, 2006, pp. 184–235.
- 11 『ブルトマン著作集2：共観福音書伝承史Ⅱ』（加山宏路訳，新教出版社，1987年），236–237頁。
- 12 『マタイによる福音書』（以下，マタイと略記）や『ルカによる福音書』（以下，ルカと略記）の各並行箇所においては、「気が狂っている」との世間の評判——『ヨハネによる福音書』（以下，ヨハネと略記）は、「気が狂っている」という評判をユダヤ人集団に帰している（10章20節）——，イエスを取り押さえに来たイエスの家族の動き，人々が押し寄せてくる臨場感などは描かれていない。
- 13 「オクロス」は，紀元前三世紀から紀元後四ないし五世紀に遡るいろいろなパピルス文書，一世紀のユダヤ人歴史家ヨセフスの『ユダヤ戦記』（以下，戦記と略記）や『ユダヤ古代誌』（以下，古代誌と略記），二世紀成立の使徒教父文書『ポリュカルポスの殉教』，紀元前三世紀～一世紀に遡る七十人訳，『ヨブの遺訓』『十二族長の遺訓』などの旧約偽典，ヘロドトス，プラトン，トゥキュディデスなどの各作品を含む古典ギリシアの文献諸資料に見出される語である。J. H. Moulton and G. Milligan, *Vocabulary of the Greek Testament*, Hendrickson Publishers, 1997, p. 470; Walter Bauer, *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, Chicago: The University of Chicago Press, 1979, 2. ed./rev. and augm. by F. Wilbur Gingrich and Frederick W. Danker from Walter Bauer's 5. ed., 1958, pp. 745–746. ヨハネ7章49節（＝「律法を知らないこの群衆は呪いをかけられている」）における「群衆」も「オクロス」であり，そこでは社会下層民に対する侮蔑

が込められている。このことを例証するのが、四～五世紀に由来するシナイ写本のシリア語テキストの読みと、五世紀に由来するクレトニア写本のシリア語テキストの読みである。前者は“qṭn”という読みを、後者は“quṭn”という読みをそれぞれ採用している。George Anton Kiraz, *Comparative Edition of the Syriac Gospels. Aligning the Sinaiticus, Curetonianus, Peshitta, and Harklean Versions, Volume 4: John*, Gorgias Press, 2004, p. 148. これらのシリア語テキストの読みで採用されている単語の語根は、それに相当するヘブライ語の単語の語根“qṭn”（『エレミヤ書』[以下、エレミヤと略記] 6章13節、『サムエル記・上』9章21節）と同じである。前者は「偏狭な」「貧弱な」などの意を含み、後者は「取るに足らない」「ちっぽけな」などの意を含むが（Ed. by Francis Brown, S. R. Driver, and Charles A. Briggs, *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament*, Oxford: The Clarendon Press, 1977, p. 882）、両者とも、社会的に力を持たない、劣等の地位にあることが含意されている。さらに、上記の二つのシリア語訳写本は、二世紀後半に遡るとされるタティアノスの『福音書調和』（ディアテッサロン）の影響を受けているとするならば、五～六世紀に由来するヨハネ7章49節のペンシタ本文よりも古い可能性も考えられる。なお、シリア語訳テキストについては、Bruce M. Metzger, *The Early Versions of the New Testament: Their Origin, Transmission and Limitations*, Oxford University Press, 2001, pp. 36ff. を参照。

- 14 クムラン教団の禁欲的生活の様子 については、戦記の関連箇所（2.119–120, 122, 137–142, 152–153; Josephus, *The Jewish Wars, Books I–III*, Harvard University Press, 1961, pp. 154, 156）、及び、アレクサンドリアのフィロンの『すべて善い人は自由である』（75–80; Philo, *Quod Omnis Probus Liber Sit*, Harvard University Press, 1960, pp. 52–60）を参照。また、財産の持参、共同の食事や審議、罰則、世間との絶縁などの共同体規則を記した死海写本の『宗規要覧』の関連箇所（1.12, 4.19–20, 4.24–25, 5.7–11, 6.2–3, 6.13–23, 7.6–7など）も参照。ヘブライ語テキストは、*The Dead Sea Scrolls. Hebrew, Aramaic, and Greek Texts with English Translations. Volume I: Rule of Community and Related Documents*, ed. by James H. Charlesworth, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1994, pp. 6–51を参照。
- 15 「タダイ」にはいろいろな異読がある。「レバイオス」（五～六世紀起源のペ

ザ写本など), 「タダイと呼ばれるレッバイオス」(六世紀起源のエフラエム写本など), 「レッバイオスと呼ばれるタダイ」(小数の写本), 「ゼロテユダ」(いくつかの古ラテン語写本)もある。古ラテン語訳を重視する立場に立って, 「レバイオス」という表記を「レビ」のラテン語訳とする説もある(Barnabas Lindars, “Matthew, Levi, Lebbaeus and the Value of the Western Text,” in *New Testament Studies IV*, 1958, pp. 220–223)。また, 「レバイオス」を「心」を意味するヘブライ語(レーブ)と結びつけ, 「タダイ」を「胸の乳首」を意味するアラム語(タド)に遡らせる解釈もある。しかし, これらの説の真偽は定かではない。Gustav Dalmann, *The Words of Jesus in the Light of Post-Biblical Jewish Writings and the Aramaic Language*, Publisher Edinburgh: T. & T. Clark, 1902, p. 50。なお, 「タダイ」は「テオドンシオス」「テオドトス」「テオドーロス」の省略形(田川建三訳註『新約聖書第一巻上—マルコ福音書/マタイ福音書』, 作品社, 2008年, 190頁)。同一人物がセム語名で「レバイ」と呼ばれ, ギリシア語名では「テウダス」と呼ばれたのか。

- 16 田川建三訳註『新約聖書第二巻上—ルカ福音書』, 作品社, 2011年, 206頁。
- 17 Joseph Klausner, *Jesus: His Life, Times, and Teaching*, London: George Allen & Unwin, 1928, p. 284.
- 18 「これが, ティベリアスのタダイの子ラビ・ヨセがラバン・ガマリエルに尋ねた質問である。もし, 妻と同居する私が彼女の娘と同居することが禁じられている場合, 既婚女性の娘と同居することが禁じられている以上, 彼女と結婚することが禁じられるのはなおさら当然であることか!」(*Derekh Eretz Rabbah*, Chapter 1)。Ed. by Abraham Cohen, *Minor Tractates: Translated into English. With Notes, Glossary and Indices*, London: The Soncino Press, 1984, p. 110.
- 19 マルティン・ヘンゲル著, 長窪専三訳『ユダヤ教とヘレニズム』, 日本基督教団出版局, 1983年, 176頁以下。
- 20 Joseph Klausner, *op. cit.*, p. 285.
- 21 「イスカリオテのユダ」という名前の語源的説明については, 次の文献に詳細に紹介されている。Harald Ingholt, “The Surname of Judas Iscariot,” in *Studia Orientalica Ioanni Pedersen*, Copenhagen, 1953, pp. 152–162.
- 22 Gustav Dalmann, *op. cit.*, pp. 51–52.

- 23 Ed. by Marcus Jastrow, *A Dictionary of the Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi and the Midrashic Literature*, New York, 1926, p. 1019.
- 24 Josephus, *op. cit.*, p. 422, 424.
- 25 Josephus, *Jewish Antiquities. Books XVIII-XX*, Harvard University Press, 1965, p. 433.
- 26 さらに, Emil Schürer, *A History of the Jewish People in the Age of Jesus Christ (175 B. C.-A. D. 135): Volume I*, Edinburgh: T. & T. Clark, 1973, p. 464を参照。
- 27 Charles C. Torrey, “The Name ‘Iscariot,’” in *Harvard Theological Review* XXXVI, 1943, pp. 51-62.
- 28 Yoël Arbeitman, “The Suffix of Iscariot,” in *Journal of Biblical Literature* 99/1 (1980), pp. 122-124.
- 29 George Anton Kiraz, *Comparative Edition of the Syriac Gospels: Aligning the Sinaiticus, Curetonianus, Peshitta and Harklean Versions: Volume III Luke*, p. 437; *Volume IV John*, p. 124 (Gorgias Press, 2004).
- 30 George Anton Kiraz, *Comparative Edition of the Syriac Gospels: Aligning the Sinaiticus, Curetonianus, Peshitta and Harklean Versions: Volume II Mark*, p. 35; *Volume I Matthew*, p. 126 (Gorgias Press, 2004); *Volume III Luke, op. cit.*, p. 99.
- 31 Ed. by Edward William Lane, *An Arabic-English Lexicon*, London: Williams & Norgate 1863, p. 1581.
- 32 Ed. by J. Payne Smith, *A Compendious Syriac Dictionary*, Wipf and Sock publishers, 1999, p. 389.
- 33 Ed. by Marcus Jastrow, *op. cit.*, pp. 986, 1021.
- 34 Albert Ehrman, “Judas Iscariot and Abba Saqqara,” in *Journal of Biblical Literature* 97/4 (1978), pp. 572-573.
- 35 Lazarus Goldschmidt, *Der babylonische Talmud nach der ersten zensurfreien Ausgabe unter Berücksichtigung der neueren Ausgaben und handschriftlichen Materials neu übertragen, 2. Aufl., Bd. 6. Sota, Gittin, Qiddušin*, Königstein/Ts.: Jüdischer Verlag, 1964-1967, s. 365.
- 36 ミシェル・バストゥロー著, 篠田勝英訳『ヨーロッパ中世象徴史』, 白水社,

2008年, 193頁以下。

- 37 Joan E. Taylor, “The Name ‘Iscariot’,” in *Journal of Biblical Literature* 129/2 (2010), pp. 367–383. Marcus Jastrow, *op. cit.*, p. 992.
- 38 ドミニク・クロッサン, バートン・マック, エレース・ペーゲルスなど。
- 39 マソラ本文を直訳すれば, 「主はわれわれすべての者の不義を彼に降りかからせた」(私訳)となる。
- 40 John Dominic Crossan, *Who killed Jesus?: Exposing the Anti-Semitism in the Gospel Story of The Death of Jesus*, HarperOne, 1996, pp. 65–81.
- 41 Burton L. Mack, *A Myth of Innocence: Mark and Christian Origins*, Philadelphia: Fortress Press, 1991, pp. 271, 292–293, 304–305, 325–331.
- 42 Burton L. Mack, *op. cit.*, pp. 304–305.
- 43 エレース・ペイゲルス, カレン・L・キング共著, 山形孝夫・新免貢共訳『ユダ福音書』の謎を解く』(河出書房新社, 2013年)。
- 44 「裏切者ユダ」, 及び, 『ユダ福音書』をめぐる諸議論については, 拙稿を参照。「『ユダ福音書』論」『研究年報47号』, 宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所発行, 2014年3月, 1–67頁。
- 45 *Funk-Bihlmeyer, Die Apostolischen Väter: I. Teil*, Tübingen, 1956, s. 136–137.
- 46 ANTE-NICENE FATHERS. VOLUME 8: *The Twelve Patriarchs, Excerpts and Epistles, The Clementina, Apocrypha, Decretals, Memoirs of Edessa and Syriac Documents, Remains of the First Ages*, ed. by A. Roberts and J. Donaldson, T&T CLARK, 1886, pp. 122–125に基づく再構成。ラテン語テキストは, *Του εν αγιοισ πατρος ημων Κλημεντος, παπαρωμης, τα ευρισκομενα παντα*, accurate, J.-P. Migne Reprint ed. Turnholti: Typographi Brepols, 1969を参照。
- 47 ただし, 五ないし六世紀に由来するベザ写本などでは, 「十二人」からユダが脱落したことを受けて, 「十一人」という読みが採用されている。
- 48 Hans Lietzmann, *An Die Korinther I/II*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1969, s. 79–80.
- 49 Eusebius, *The Ecclesiastical History I*, Harvard University Press, 1959, pp. 82, 84.
- 50 たとえば, マタイ28章16節(=「そして, 十一人の弟子たちはガリラヤへと

行き、イエスが彼らに命じておいた山に行った』)、マルコ16章14節(=「それから、イエスは食卓についている十一弟子たちに現れ、彼らの不信仰と、心のかたくななことを叱責した。なぜなら、彼らは、よみがえった彼を見た人々を信じなかったからである」)、ルカ24章9節(=「そして、墓から戻り、これらのことをすべて十一人の弟子たちや、その他みんなの者たちに報告した」)、同33節(=「そして、その時、立ってエルサレムに帰ると、十一人の弟子たちとその仲間が集合し」)、言行録1章26節(=「それから、彼らのためにくじを引き、そして、くじはマッテヤに当たり、彼が十一人の使徒たちに加えられた」)を参照。

- 51 *Acta Philippi et Acta Thomae, Accedunt Acta Barnabae*, edidit Maximilianus Bonnet, Hildesheim: G. Olms, 1959, p. 92.
- 52 A. de Santos Otero, *Los Evangelicos Apócrifos*, Quinta Edición, Madrid, 1985, p. 393.
- 53 同様の言葉は『エレミヤ余録』9章18節にも記録されている。「『彼(キリスト)はやがて来たりたまひ、出て行ってご自分のために十二使徒をお選びになる。それは異邦人たちの中で福音を宣べ伝えさせるためである』。これを聞いた民衆は憤激して、『これは、「わたしは神と神のみ子とを見た」と言ったあのアモツの子イザヤの語った言葉と同じだ』と言った」。
- 54 村岡崇光訳『イザヤの殉教と昇天』の当該箇所注を参照(『聖書外典偽典別巻2 新約聖書編』, 教文館, 1982年, 454頁)。
- 55 Eusebius, *op. cit.*, p. 309.
- 56 ラテン語テキストは, http://khazarzar.skeptik.net/books/hieronym/viris_1.htm を参照。
- 57 <http://www.earlychristianwritings.com/text/aristides-kay.html> に掲載されている英語訳テキストに基づく再構成。
- 58 「護教論者」に関する明確な説明としては、「様々な批判に答えて—アリストイデスからテルトゥリアヌスまでの護教論者」(アラン・コルバン編, 浜名優美監訳『キリスト教の歴史—現代をよりよく理解するために—』, 藤原書店, 2010年, 73頁)を参照。そこには次のように述べられている。「キリスト教の新興共同体と多数の民衆, 知的エリート, 行政当局との対立は, その中で同宗者を弁護する [apologesthai] ために最も教養ある学者たちに

発言させるに至り、彼らは権力に対して嘆願をしたり、同胞に公開書簡を送ったりした。これが一般に『護教論者』と呼ばれる著者たちであり……」。

- 59 *Του εν αγιοις πατρος ημων Ιουστινου φιλοσοφου και μαρτυρος τα ευρισκομενα παντα*, Turnholt: Typographi Brepols, 1967, p. 388.
- 60 *Op. cit.*, p. 565.
- 61 *Quinti Septimii Florentis Tertulliani presbyteri Carthaginensis Opera omnia, cum selectis praecedentium editionum lectionibus variorumque commentariis*, Turnholt: Typographi Brepols editores pontificii, 1844, p. 387.
- 62 *Του εν αγιωω πατρος ημων Ειρηναιου επισκοπου λουιδουνου και μαρτυρος ελεγχου και ανατροπης της φευδωνυμου γνωσεωσ βιβλια πεντε*, Turnholt: Typographi Brepols, 1966, pp. 470, 648–649, 779, 1045.
- 63 Edgar Hennecke, *op. cit.*, p. 101.
- 64 <http://gnosis.org/library/excr.htm> を参照。
- 65 *Ibid.*
- 66 *Ωριγενους, τα ευρισκομενα παντα Ωριγενους: κατα κελσου*, Turnholt: Typographi Brepols, [n.d.], p. 773.
- 67 *Op. cit.*, p. 868.
- 68 そこでイエスは十二弟子に言った、「あなたたちも去ろうとするのか」。シモン・ペテロが彼に答えた、「主よ、私たちは、だれのところに去って行きましょう。あなたは、永遠の命の言をもっています。しかも、私たちは、あなたが神の聖者であることを信じてきたのであり、またそのことを認識してきました」。イエスは彼らに答えた、「あなたたち十二人を私が選んだのではなかったか。ところが、あなたたちの中のひとりとは悪魔である」。そして、彼はイスカリオテのシモンの子ユダのことを言った。というのは、この者は十二弟子のひとりであるが、イエスをまさに裏切ろうとしていたからである。
- 69 Ed. by Alexander Roberts and James Donaldson, *Ante-Nicene Christian Library. Translations of the Writings of the Fathers Down to A. D. 325, Vol. XVII*, Edinburgh, p. 157.
- 70 Xenophon, *Hellenica. Book I–V*, Harvard University Press, 1961 pp. 154, 156.
- 71 Ed. by Rodolphe Kasser et al, *op. cit.*, p. 85 (33: 13–14).
- 72 詳細は、上掲書（『ユダ福音書』の謎を解く』）を参照。

- 73 Walter Till(Hrsg.), *op. cit.*, p. 66 (9: 18-20).
- 74 詳細は、カレン・L・キング著、山形孝夫・新免貢共訳『マグダラのマリアによる福音書—イエスと最高の女性使徒』(河出書房新社, 2006年)を参照。
- 75 日本語訳は、ラザルス・ゴールドシュミットのドイツ語訳版テキストに依拠(Lazarus Goldschmidt, *Der babylonische Talmud nach der ersten zensurfreien Ausgabe unter Berücksichtigung der neueren Ausgaben und handschriftlichen Materials neu übertragen*, 2. Aufl., Bd. 8. *Baba Bathra/Synhedrin. 1 Hälfte*, Berlin: Jüdischer Verlag, 1967, s. 631-632)。
- 76 関根正雄訳『旧約聖書』, 教文館, 1997年。
- 77 『申命記』13章10節「君は必ず彼を殺さなければならない。君が最初に手を下し、すべての民がそれに続いて、彼を殺さなければならない」。
- 78 『詩篇』(以下、詩と略記)42編3節「わが魂はヤハヴェに向かい、生ける神に向かって、あえぐ。いつ、わたしは行って、ヤハヴェのみ顔を見うるのであろう」。
- 79 詩41編6節「わが敵はわたしに向かって災いのことを言う、『彼はいつ死に、その名はいつ滅び失せる』と」。
- 80 『出エジプト記』(以下、出と略記)23章7節「偽りの多い事柄からは遠ざかるがよい。罪なき者、義しい者を殺してはならない。わたしは罪ある者を義しいとはしないからである」。
- 81 詩10編8節「彼は村里に待ちぶせして、罪なき者をひそかに殺し、その眼はよるべなき者をうかがう」。
- 82 イザヤ11章1節「イシャイの切り株からひとつの芽が出、その根からひとつの若枝が出る」。
- 83 イザヤ14章19節「しかしお前は嫌われた枝のようにお前の墓から投げ出され、剣に刺された者の死屍で蔽われ、踏みつけられた死骸のようだ。墓石へと下るものらと」。
- 84 出4章22節「そこで君はパロに言いなさい、『こゝろヤハヴェは言われた、イスラエルはわが長子である』」。
- 85 出4章23節「わたしが君にわが子を去らせ、わたしにさえさせよ、と言ったのに、君は彼を去らせることを拒んだ。見よ、わたしは君の長子を殺そう」と」。

- 86 詩100編1節「感謝のための歌」。
- 87 詩50編23節「感謝をささげものにする者はわたしを崇める者」。
- 88 ペーター・シェーファー著、上村静・三浦望共訳『タルムードの中のイエス』、岩波書店、2010年、113-124頁。
- 89 Lazarus Goldschmidt, *op. cit.*, s. s. 632, n. 26.
- 90 *JPS Hebrew-English TANAKHA: The Traditional Hebrew Text and The New JPS Translation, 2nd. ed.*, Jewish Publication Society, 2003, p. 877.
- 91 「腐った」に相当するギリシア語表現 (ebdelugmenos) は、「忌み嫌う」という動詞 (bdelussesthai) の現在完了受動態分詞形である。『ローマ人への手紙』(以下、ローマと略記) 2章22節(「(偶像を) 忌み嫌う」)においてこの動詞は偶像との関係で用いられているが、『ヨハネの黙示録』(以下、黙示録と略記) 21章8節(「忌むべき者」)では、異教の生活習慣や悪徳にどっぷりつかっていることに関連して用いられている。この派生語の用法も、偶像礼拝のみならず、「胸糞の悪い」「嫌悪を抱かせる」いろいろな事柄に関連している。「忌むべき (bdeluktos)」(『テトスへの手紙』1章16節)、「忌み嫌われるもの (bedelugma)」(マタイ24章15節/マルコ13章14節、ルカ16章15節、黙示録17章4-5節、21章27節)を参照。
- 92 マルコ1章10-11節/マタイ3章16-17節/ルカ3章21-22節。
- 93 マルコ9章7節/マタイ17章5節/ルカ9章35節。
- 94 『コロサイ人への手紙』1章15-16節「御子は、見えざる神の姿であって、すべての被造物の最初に生まれた者である。彼において、天にあるものも地上にあるものも、見えるものも見えざるものも、万物は造られた、なぜなら、王座も主権も、支配も権力も、万物は、御子を通して、御子へと造られたからである」。
- 95 同上1章18節「そして自らは、教会というからだのかしらである。彼は初めであり、死人の中の最初に生まれた者である。それは、彼自身がすべてのことにおいて第一の者となるためである」。
- 96 ヨハネ1章29節「その翌日、ヨハネはイエスが自分のほうに向かって来るのを見て言う、『見よ、世の罪を取り除く神の小羊』。第一コリント5章7節(=新しい粉のかたまりになるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたたちはパン種のない者たちだから。なぜなら、私たちの過越の小羊である

初期キリスト教における弟子像変遷の軌跡

キリストは、ほふられたからである』)、黙示録5章6節(=「そして、私は、御座と四つの生き物との間に、さらに、長老たちの間に、ほふられたような小羊が立っているのを見た。それに七つの角と七つの目とがあった。これらの目は、全地につかわされた、神の〔七つの〕霊である」)、同9節(=「彼らは新しい歌を歌って言う、「あなたがその書を受けとり、その封印を解くにふさわしいかたです。あなたはほふられ、その血において神のために、あらゆる部族、言語、人々、諸国民の中からあがない」)、同12節(=「大きな声が言う、『ほふられた小羊が、力と富と知恵と、勢いとほまれと栄光とさんびとを受けるにふさわしい』)、13章8節(=「この地上に住み、ほふられた小羊のいのちの書に名が世の初めからしるされていない者たちはみな、この獣を拜むであらう」)も参照。

- 97 『エフェソ人への手紙』5章2節「そして、愛のうちに歩みなさい。キリストもまた私たちを愛し、私たちのために、自分自身を神への供えもの、かんばしいかおりとなるいけにえとして引き渡したのである」。
- 98 ローマ3章25節「神は彼を立て、彼の血において信仰による宥めの供え物とした」。『ヨハネの第一の手紙』2章12節(=「子たちよ。私はあなたたちに書く。御名のゆえに、あなたたちの多くの罪がゆるされたからである」)も参照。
- 99 ヘブル9章14節「永遠の聖霊によって、自分自身を傷なき者として神にささげたキリストの血は、なおさら、生ける神に仕える者となるために、私たちの良心を死んだわざからきよめないであろうか」。同25-26節「それは、大祭司が年ごとに自分以外のものの血をたずさえて聖所に入っていくように、キリストが何度も自分自身を供えるためでもなかった。もしそうであれば、世の基礎が据えられた時から何度も苦難を受けねばならなかったことになるからである。しかし今や、一度だけ世の終りに、彼のいけにえの血による罪の破棄のために現れたのである」。
- 100 Joseph Klausner, *op. cit.* pp. 29f.
- 101 『ピスティス・ソフィア』と『イエウーの書』については、クルト・ルドルフ著『グノーシス—古代末期の一宗教の本質と歴史—』(大貫隆・入江良平・筒井賢治共訳、岩波書店、23-24頁、188-9頁)を参照。さらに、下記の文献も参照。Edgar Hennecke, *New Testament Apocrypha: Volume 1*, pp.

259-262.

- 102 Bentley Layton, *The Gnostic Scriptures: A New Translation with Annotations and Introductions*, Doubleday, 1987, p. 107, n. d.
- 103 Edgar Hennecke, *op. cit.*, p. 262
- 104 コプト語テキストは、カール・シュミット編纂のものを参照 (*Pistis Sophia*, Text ed. by Carl Schmidt, trans. and notes by Violet Macdermot, Leiden: Brill, 1978, p. 353)。
- 105 『エビオン人福音書』以外のユダヤ人キリスト教の福音書として、『ヘブライ人福音書』と『ナザレ人福音書』がある。これらの書物の表題自体は、異郷にあって「ヘブライ人」という称号を名乗るユダヤ人キリスト教徒、「ナザレ人」——キリスト教徒を指す「ナヅラ人」(言行録24章5節)の変化形——と呼ばれるシリア圏のユダヤ人キリスト教徒、「エビオン派」と呼ばれる東方のユダヤ人キリスト教徒など、ユダヤ人キリスト教にはいろいろな潮流が存在したことを示唆する。エビオン人の起源は、ローマとユダヤの戦争直前に啓示による託宣を受け、ヨルダンの東岸の町ペラに逃れたエルサレム原始教団の人々 (エウゼビオス『教会史』3.5.3; Eusebius, *The Ecclesiastical History I*, Harvard University Press, 1959, pp. 198, 200)にあるとする見解もある。W. レベル著, 上掲書, 133-143頁。
- 106 ギリシア語テキストは, *Fragmente Apokryph Geworderer Evangelien in Griechischer und Latenischer Sprach*, hrsg. und übersetzt und eingeleitet von Dieter Lührmann, in Zusammen mit Egbert Schlarb, Marburg: N. G. Elvert Verlag, 2000, s. 36-37に依る。
- 107 W. レベル著, 上掲書, 144-151頁。『使徒書簡』のテキストは、欠損箇所を含むコプト語版, エチオピア語の完本, ラテン語断片で残存するが、もともとはギリシア語で書かれた。次の文献に全訳が掲載されている。Edgar Hennecke, *op. cit.*, pp. 191-227.
- 108 シリア語テキストは, *The Didaschalia Apostolorum in Syriac I. Chapters I-X*, ed. by Arthur Vööbus, Secretariat du Corpus SCC, Wavers Waversebaan, 1979, p. 31を参照。
- 109 コプト語テキストは, *A Manichean Psalm Book. Part II*, ed. by C. R. C. Allberry, W. Kohlhammer, 1938, pp. 193-194を参照。

- 110 マタイ27章56節では、「サロメ」ではなく「ゼベダイの子たちの母」が登場している。マルコによると、埋葬を見届けた女性たちは「マグダラのマリアとヨセの母」（15章47節）、安息日明けの週の初めの日に墓を見に行った女性たちは「マグダラのマリアとヤコブの母マリアとサロメ」（16章1節）である。一方、マタイによると、「マグダラのマリアと他のマリア」が埋葬を見届け、墓を訪問している（27章61節、28章1節）。これらに対して、ルカの並行箇所（23章49節、55節、24章1節）においては、イエスの死と埋葬を見届け、墓に足を運んだ女性たちの名前は記されてさえない。
- 111 ルカ23章49節では、ガリラヤから従ってきた女性たちのことは言及されているものの、「多かった」とは書かれていない。
- 112 Ed. by Douglass M. Parrott, *Nag Hammadi Codices. V, 2-5 and VI with Papyrus Berolinensis 8502, 1 and 4*, 1979 in *The Coptic Gnostic Library: Volume 3*, Leiden: Brill, 2000, pp. 98-99.
- 113 『ペテロ福音書』に関しては、上述のエウセビオスが『教会史』（3.3.2; 3.25.6）において異端文書として言及している（Eusebius, *op. cit.*, pp. 192, 256, 258）。同6.12によると、紀元200年頃のアンティオキアの司教セラピオンは、『ペテロ福音書』について小冊子（『ペトロスによる福音書と呼ばれるものについて』）を書き、イエスの肉体性と苦難を否認するキリスト仮現論（ドケティズム）の傾向が強い文書としてこれを排除した（Eusebius, *The Ecclesiastical History II*, Harvard University Press, 1957, pp. 38, 40）。オリゲネスは、『マタイ福音書注解』（X・17）において、『ペテロ福音書』に依拠して、イエスの兄弟たちはヨセフと前妻との間にできた子たちであると言う者たちがいると述べている（<http://www.sacred-texts.com/chr/ecf/009/0090368.htm>）。この証言は、『ペテロ福音書』の失われた部分と関係しているかもしれない。『ペテロ福音書』、『ペテロの黙示録』、『ギリシア語エノク書』の各諸断片を含む写本は、1886-1887年の冬、八世紀ないし十二世紀に遡る上エジプト・アクミームの修道僧の墓の中から発見され、現在カイロ博物館に所蔵されている。『ペテロ福音書』については、仮現論的傾向や新約聖書の四福音書との関係をめぐって議論が分かれている。詳細は、C. Mauer, “The Gospel of Peter,” in Edgar Hennecke, *op. cit.*, pp. 179-183を参照。さらに、田川建三「『ペテロ福音書』解説」（荒井献編『新約聖書外典』、講談社、

- 1979年, 478-481頁), 及び, W. ラベル著『新約外典・使徒教父文書概説』(筒井賢治訳, 教文館, 2001年, 113-123頁)を参照。
- 114 ギリシア語テキストは, 注52で言及した A. de Santos Otero のものを使用。
- 115 “Ipsium autem Christum affirmavit a Judaeis fugatum, collecta nongentorum homineum manu, latrocinia fecisse”. *Lucii Cæcili Firmiani Lactantii Opera omnia*, Paris: Excudebat Sirou, 1844, p. 557.
- 116 William Horbury, “Christ as brigand in ancient anti-Christian polemic,” in *Jesus and the Politics of His Day*, ed. by Ernst Bammel and C. F. D. Moule, Cambridge University Press, 1984, pp. 183-195.
- 117 *Ευσεβίου του Παμφίλου, επικοπου της εν Παλαιστινη Καισαρειας, Τα ευρισκομενα παντα*, collegit et denuo recognovit J.-P. Migne, Turnholti: Typographi Brepols, 967-1969, pp. 796-797.
- 118 「そして, このためユダヤ人たちはイエスを追及した。なぜなら, イエスが安息日にこれらのことを行ったからである」。
- 119 「このためにユダヤ人たちは今や, ますますイエスを殺そうと狙っていた。なぜなら, イエスが安息日を破棄しただけではなく, 神を自分の父と呼び, 自分自身を神と同等であるとしたからである」。
- 120 「それゆえ, イエスは, もはや公然とユダヤ人の中で行動せず, そこから荒野に近い地方のエフライムと呼ばれる町に出て行き, そこで弟子たちと滞在していた」。
- 121 イエスのもとにやって来た大勢の名も無き人々に対して, マルコ 3 章 7 節は “polu plethos”, マタイ 4 章 25 節は “ochloi polloi”, ルカ 6 章 17 節は “ochlos polus” という言い回しを用いている。マルコ 3 章 7 節の言い回しには, とにかくたくさんのおびたしい人々というイメージが他の二つの福音書と比べて, 鮮明に表現されているように思われる。
- 122 Andrew Queen Morton, *Literary Detection: How to Prove Authorship and Fraud in Literature and Documents*, Simon & Schuster, 1978; Andrew Queen Morton, S. Michaelson, J. David Thompson, *A Critical Concordance to the Letter of Paul to the Ephesians*, 1980, Biblical Research Associates, 1980.
- 123 A. Q. Morton and James McLeman, *Christianity in the Computer Age*, New York: Harper & Row, 1964, p. 61.

- 124 蛭沼寿雄『新約正典のプロセス』, 山本書店, 1972年, 33頁。
- 125 クロード・レヴィ=ストロース著, 川田順造訳『悲しき熱帯(下)』, 中央公論社, 1988年, 169-170頁。
- 126 Plato, *Timaeus, Critias, Cleitophon, Menexenus, Epistles*, Harvard University Press, 1952, p. 558-566.
- 127 Fritz Rienecker, *A Linguistic Key to the Greek New Testament*, Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1980, p. 270.
- 128 J. H. Moulton & G. Milligan, *Vocabulary of the Greek Testament: Illustrated from the Papyri and other Non-Literary Source*, Hodder & Stoughton, 1930, p. 7.
- 129 荒井献氏は、この一文に、「無学で普通の人間」に対する教養人ルカとそのキリスト教の差別意識を読み取るが、あえてその必要はないと考えられる。荒井献『現代新約注解全書：使徒行伝(上巻)』, 新教出版社, 1977年, 281頁。
- 130 Seneca, *Moral Essays. De Beneficus*, Harvard University Press, 1958, p. 326.
- 131 たとえば、キケロの「弁論家」(ii.6.25)を参照。*Cicero: De Oratore I*, Harvard University Press, 1959, p. 214.
- 132 William V. Harris, *Ancient Literacy*, Cambridge, Mass.: Harvard U.P., 1989, pp. 5f.
- 133 Plato, *op. cit.*, p. 34.
- 134 Xenophon, *Memorabilia and Oeconomicus*, Harvard University Press, 1959, p. 282.
- 135 Aristotle, *Historia Animalium I*, Harvard University Press, 1965, p. 16.
- 136 Thucydides, *History of the Peloponnesian War I and II*, Harvard University Press, 1980, p. 342.
- 137 Polybius, *The Histories Books 1-2*, Harvard University Press, 2010, p. 206.
- 138 Pausanias, *Description of Greece I. Books I and II*, Harvard University Press, 1959, p. 318.
- 139 John Albert Bengel, *New Testament Word Studies, Volume 1: Matthew-Acts*, Grand Rapids: Kregel Publications, 1971, p. 773.
- 140 E. Haenchen, *Die Apostelgeschichte*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1968, s. 177.

- 141 C. K. Barrett, *ICC: A Critical and Exegetical Commentary on the Acts of the Apostles. Volume 1*, T&T Clark, 1994, pp. 233f.
- 142 F. F. Bruce, *The Acts of the Apostles: The Greek Text With Introduction and Commentary*, Grand Rapids, MI: William B. Eerdmans, 1951, pp. 152f.
- 143 Gustav Stählin, *Das Neue Testament Deutsch: Die Apostelgeschichte*, Vandenhoeck & Ruprech, 1968, s. 70, 74.
- 144 Josephus, *Jewish Antiquities. Books I-IV*, Harvard University Press, 1961, p. 282.
- 145 Joseph A., Fitzmyer, *The Anchor Bible: The Acts of the Apostles*, Doubleday, 1997, pp. 302f.
- 146 Karl Bihlmeyer, *op. cit.*, s. 45. 小河陽訳では、「声にひ弱な舌足らず」。荒井献編『使徒教父文書』, 講談社, 1997年, 97頁。
- 147 秋山学訳。「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』(綴織)第1巻—全訳」『文藝言語研究. 文藝篇』63巻, 筑波大学文藝・言語学系, 2013年, 63-163頁。
- 148 注66に挙げたミュー版ラテン語テキストに拠る。
- 149 「そして、彼は、ガリラヤ湖畔を歩いていると、ペテロと呼ばれるシモンと、彼の兄弟アンデレの二人の兄弟を見た。彼らは湖に向かって網を打っていた。彼らは漁師たちだからである。そして彼は、彼らに言う、『私についてきなさい。あなたたちを人間をとる漁師にしてあげよう』。すると、彼らは網を捨てて、イエスに従った」。
- 150 *Commentariorum In Evangelium Matthaei Libri Quattuor*, 398.
- 151 *Die Pseudoklementine II: Rekognitionen in Rufins Übersetzung*, hrsg. von Bernhard Rehm; [bearb.] von Georg Strecker, 1994, s. 200.
- 152 Hans Conzelmann, *A Commentary on the Acts of the Apostles*, Philadelphia: Fortress, 1987, p. 33.
- 153 *Plato, Euthyphro; Apology; Crito; Phaedo; Phaedrus*, Harvard University Press, 1914, p. 108.
- 154 E. Plümacher, *Lukas als hellenistischer Schriftsteller: Studien zur Apostelgeschichte*, Göttingen, 1972, s. 20.
- 155 ゲルト・タイセン著, 荒井献・渡辺康磨共訳『イエス運動の社会学—原始

キリスト教成立史によせて』, ヨルダン社, 1981年, 17頁。Gerd Theißen, “Gruppenmessianismus: Überlegungen zum Ursprung der Kirche im Jüngerkreis Jesu,” in *Jesus als historische Gestalt: Beiträge zur Jesusforschung. Zum 60. Geburtstag*, hrsg. von A. Merz, Göttingen, 2003, 255–281.

- 156 新約聖書の四福音書の中から「弟子ユダ」に関する言及例を分析した荒井献『ユダとは誰か—原始キリスト教と『ユダの福音書』の中のユダ—』（岩波書店, 2007年）は、使徒教父文書に収められている『パピアスの断片』を含む諸資料から確認される「ユダ像」を詳細に紹介している。